

法政大学 国際日本学研究所

Hosei University Research Center
for International Japanese Studies

The Newsletter



No.20 Jul.2014



C O N T E N T S

所長ご挨拶	2
シンポジウム報告	4
ワークショップ報告	9
研究会報告	14
東アジア文化研究会報告	16
勉強会報告	27
刊行案内	36

2013年11月1日(金)～3日(日)
2013年アルザスシンポジウム
国際日本学シンポジウム「日本のアイデンティティとアジア」
(アルザス欧州日本学研究所(CEEJA))

2013.11～2014.3活動報告

所長ご挨拶



小口 雅史

法政大学国際日本学研究所 所長

本研究所は、文部科学省 21 世紀 COE プログラムに「日本発信の国際日本学の構築」が、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（学術フロンティア推進事業）に「日本学の総合的研究」が同時に採択された 2002 年に設立されました。以来、研究面で本学既設の 2 研究所—野上記念能楽研究所、沖縄文化研究所—、研究者育成面で大学院国際日本学インスティテュートと連携し、国際日本学研究センターの統括の下、上記両事業を精力的に推進しました。これらのプログラムが終了した 2007 年からは、同じ学術フロンティア推進事業で、それまでの成果を引継ぎ発展させる形で、新プログラム「異文化研究としての日本学」が採択され、やはり他の 2 研究所と結んで、国際日本学の引き続きの構築に取り組んできました。このプログラムも成功裡に終了した後は、文部科学省による新たな「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」（2010 年度～2014 年度）に、「国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討—＜日本意識＞の過去・現在・未来」が採択されました。本研究所では、今はこの事業を中心として研究活動を遂行しております。なお国際日本学研究センターは 2013 年 3 月 31 日をもって廃止となりましたが、それはこれら 4 つの機関が独自に活動しつつ、他方で互いに連携していくことが着実に実現されたことにより、協働のための上位機関を置いておく必要がなくなったと判断されたからでした。こうして、国際日本学研究所は、独自の力で他の 3 機関との連携を模索しているところでもあります。

さて本研究所設立以前にも、「日本学」なる研究分野は広く存在しました。欧州では Japanologie と呼ばれる学問分野です。つまり「日本学」そのものは外国産であって、ある言語圏で、日本の何らかの文化現象を対象に行われている学問研究が、その言語圏でまとめて「日本学」の名で呼ばれてきましたし、それは今でも変わりません。そこには文学・哲学・社会学・政治学・人類学といった人間諸科学の多様な観点が共存

しているのが普通です。このように「日本学」はもともと、それぞれの地域で学際的に開かれた存在でした。そこで、このような各地での「日本学」を結びつけ、それらにさらに国際的性格を付与することで、「日本学」総体に新たなダイナミックな展開をもたらすことを目指して、法政大学の提唱の下に立ち上げられたのが「国際日本学」です。本研究所は設立当初から、この新しい研究分野である「国際日本学」の学問としての確立、あるいはメタサイエンスとしての「国際日本学」の確立に努めてきました。2 代続けて哲学を専門とする研究者が所長の任に就いたのは、こうした経緯からすれば当然のことでありました。こうした試みは着実に成果をあげてきたと自負しております。私は歴史学を専門とする者ですが、私が所長に選ばれたのは、こうした経緯を踏まえて、これからは徐々に方法論の確立からさらに各分野の内実を具体化することへの転換が期待されているのだと思います。

世界各地における「日本学」は、日本の経済的地位の低下とともにかつての勢いは失われているとも言われています。こうした時代にあって、「国際日本学」は日本における日本研究の諸成果が、より多量、より直接的に外に発信されるものであって、世界各地での「日本学」の活性化、あるいは日本文化への新たな関心を喚起していくことに貢献できるはずで、「国際日本学」によって日本の研究者がこれまであまり交流を持たなかった海外の研究者と接して、「外から見た日本」という文化的インパクトをうけ、それがまた日本人の日本研究にも反映していくという研究の好循環が期待されます。このように双方向に研究を開くことで、「国際日本学」は、グローバリゼーションが進行する現世界下における、日本文化の特殊性と普遍性を見直しおよび再発見、すなわち日本人研究者だけでは分からない真の日本理解が可能になっていくはずで、これからは名目だけではない、こうした「真の協業」を目指していきたいと考えています。

Greetings from the Director

Oguchi Masashi

Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies

“Japanese Studies” has existed as a field of research for a long time. Although research is conducted overseas focussing on various Japanese cultural phenomena, “Japanese Studies” is an academic opportunity that allows diverse viewpoints to co-exist on literature, philosophy, social science, politics and anthropology. By connecting “Japanese Studies” from all regions of the world, and understanding the

international features of each example, we aim to give “Japanese Studies” a new and dynamic opening that we at Hosei University have coined “International Japanese Studies”. Our Research Center has strived to establish this new research field of “International Japanese Studies” as a meta-science. In the future, however, we anticipate gradual change from the establishment of methodology to observing actual practice in each field. “Japanese Studies” around the world is said to have lost its past fervour, yet through research in “International Japanese Studies” we hope to encourage a reconsideration and rediscovery of the specialty and universality of Japanese culture that will further our aim towards “true international collaboration”.

所长致词

小口 雅史
法政大学国际日本学研究所 所长

日本学这一研究领域古已有之，是日本以外的各国对日本的某种文化现象进行的研究，也是文学、哲学、社会学、政治学、人类学等多种视点共存的学际间存在。在法政大学的提倡下建立起来的“国际日本学”的目标，正是要将世界各地的“日本学”联系起来，赋予其国际性，

从而实现“日本学”更新更具活力的发展。到目前为止，本研究所一直致力于将“国际日本学”这一全新的研究领域作为元科学进行建设，今后的工作重点将逐步由方法论的确立转换到各领域工作的具体化问题上。世界各地的“日本学”虽然被认为正在失去以往的发展劲头，但通过对“国际日本学”的研究，期待对日本文化的特殊性与普遍性的重新认识与再发现，以及“真正的国际性协同作业”这一目标能够得以实现。

신임소장 인사말

오구치 마사시(小口 雅史)
호세이(法政)대학교 국제일본학연구소 소장

‘일본학’이라는 연구분야는 오래전부터 존재했습니다. 해외 여러 나라에서 일본의 다양한 문화 현상을 대상으로 한 연구가 이루어지고 있는데, 이런 연구에 문학·철학·사회학·정치학·인류학 등 다양한 관점이 공존하는 학제적인 연구가 진행된 분야가 ‘일본학’입니다. 이러한 각지의 ‘일본학’을 연결시키고 나아가 그 연구들에 국제성

을 부여함으로써 ‘일본학’에 새로운 다이나믹한 전개를 이끌어내는 것을 목표로 호세이대학교의 제창하에 설립된 것이 ‘국제일본학’입니다.

본 연구소는 이 새로운 연구분야인 ‘국제일본학’을 메타사이언스로서 확립시키기 위해 노력해왔습니다. 향후 방법론의 확립에서 더 나아가 각 분야의 내실을 구체화하는 방향으로의 전환이 점점 기대될 것으로 보입니다. 현재 세계 각지에서 연구되고 있는 ‘일본학’에 대한 열기는 예전만 못하지만 ‘국제일본학’ 연구를 통해 일본문화의 특수성과 보편성을 재검토하고 재발견하여 ‘진정한 국제적 협업’을 목표로 전진해 나가고자 합니다.

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
アプローチ④「＜日本意識＞の三角測量―未来へ」

2013 年アルザスシンポジウム

国際日本学シンポジウム「日本のアイデンティティとアジア」

- 日 時：2013 年 11 月 1 日（金）～11 月 3 日（日）
- 共 催：法政大学国際日本学研究所、フランス国立科学センター東アジア文明研究所、ストラスブール・マルク・ブロック大学人文科学部日本学科、アルザス欧州日本学研究所
- 会 場：アルザス欧州日本学研究所

1. シンポジウム全体の概要

法政大学国際日本学研究所（HIJAS）は、2005 年パリで「国際日本学とは何か―外から見た日本、内から見た日本」と題したシンポジウムを行なって以来、ヨーロッパの日本学研究チーム（特に現在のフランス東アジア文明研究センター）との共同開催により、毎年国際日本学シンポジウムを開催してきた。2013 年も「日本のアイデンティティとアジア」と題されたシンポジウムを 11 月 1 日から 3 日まで実施した。開催場所は、2007 年以來の会場であるアルザス欧州日本学研究所（CEEJA）であった。

今回の主題である「日本のアイデンティティとアジア」は、HIJAS の 2010 年度から 2014 年度までの研究課題「国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来」（文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業採択）によるもので、この主題の下で、今回はアジア、とくに東アジアの歴史、文化、思想、社会、政治などの諸側面と突き合わせる形で、日本のアイデンティティの「これまで」と、「これから」とが議論された。なお、今回のシンポジウムでの報告者は、日本側から 9 名、欧州側から 9 名の、合計 18 名であった。

Table 1 Detail of Symposium

Date	Name	Affiliations and Country	Theme	Language
1st November 2013	André Klein	European Centre for Japanese Studies of Alsace [France]	Guerre et paix au XXe siècle: En Europe, au Japon et en Asie	English
	Tang Chongnan	Institute of World History, Chinese Academy of Social Sciences [China]	A Chinese scholar's view on the topic of "Asia at the core of Japanese identity"	Japanese
	Philippe Pelletier	Lumière University Lyon 2 [France]	L'Extrême-Orient ou le Japon dans l'Asie, invention de concepts métageographiques	French
	Samuel Guex	University of Geneva [Switzerland]	De l'«Orient» à l'«Asie du Nord-Est»: vers un retour du Japon en Asie?	French
	Karine Marandjian	Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences [Russia]	Role of Japan on the Asian Continent: Soviet and post-Soviet interpretations	English
	Yusuke Suzumura	Hosei University [Japan]	'Japan is not the leader of Asia': Ishibashi Tanzan's criticism of Japanese expansionism and his recognition of China	English
	Kawada Junzo	Hosei University / Kanagawa University [Japan]	A critic of Fukuzawa's arguments on 'Leaving Asia' at present	Japanese
2nd November 2013	Josef Kreiner	Hosei University [Japan]	Asia in the formation of Japanese culture -Some considerations on 20th century Japanese ethnology and rehistory-	Japanese
	Alice Berthon	National Institute of Oriental Languages and Civilizations [France]	Exposer le Japon au musée national d'histoire et au musée national d'ethnologie : quelle place y occupe l'«Autre asiatique»?	Japanese
	Ohnuki-Tierney Emiko	University of Wisconsin, Madison [USA]	We all share rice and rice paddies: Asian identities of the Japanese through time	English
	Inoue Wataru	Peking University [China]	From "Wa" to "Nippon": the identity of Japan in two names	Japanese
	Viktoria Eschbach-Szabo	Eberhard Karls University, Tübingen [Germany]	Ueda Kazutoshi's concept of kokugo and modern-day Japanese	English
	Wang Min	Hosei University [Japan]	Let Dayu show the relationship between Japan, China and East Asia-A report on memorial customs of Dayu in Japan	Japanese
	Shin Abiko	Hosei University [Japan]	Between Western philosophy and Eastern thought, where to place Japanese philosophy? -Nishi Amane and tetsugaku (philosophy)-	Japanese
	Hoshino Tsutomu	Hosei University [Japan]	The place of Confucianism in modern Japanese thought	Japanese
3rd November 2013	Kamigaito Kenichi	Otsu Women's University [Japan]	The translation of Trimsatika in East Asia	Japanese
	Suzuki Seiko	University of Tokyo [Japan] / Paris Diderot University [France]	Recherches scientifiques sur la théorie de la musique orientale de Tanabe Hisao: étude sur la musicologie japonaise des années 1920	French
	Miyamoto Keizo	Hosei University Noh Theatre Research Institute [Japan]	'Is Nô a quintessentially Japanese performing art?' -Discursive shifts regarding its origins-	Japanese

2. 各発表の概要

今回の 18 人による報告の概要は以下の通りである。

- (1) アンドレ・クライン（アルザス欧州日本学研究所 [フランス]）／ヨーロッパ、または日本・アジアにおける 20 世紀の戦争と平和

第一次世界大戦と第二次世界大戦に象徴される深刻な対立を経験した欧州が、クーデンホーフ・カレルギーらの努力によって現在の欧州連合へと発展した歴史を踏まえ、文化的に共通する要素を有しながら内部での対立を抱えるアジア、とりわけ東アジアが、「ヨーロッパの和解」

とはまた別の和解を生み出すことができるかが、今日、世界全体にとっても重要な課題であることが指摘された。そして、そのことでの貢献においてこそ、日本のアイデンティティが測られるであろう、ということが示唆された。

- (2) 湯重南（中国社会科学院 [中国]、代読：井上亘）／一个中国学者对“日本身份与亚洲”的认识

「日本の民族文化の形成と東アジア」、「近代における日本の民族文化の発展と東アジア」、「日本の民族文化に対する理解」を通して、日本の文化がどのように形成されたのか、日本の文化が近代において東アジアにどのような影響

- を与えたのか、また、文化の独自性はいかに評価されるのかが考察された。近代日本が中国に与えた大きな影響も公平に評価した上で、それでも文化はそれぞれが特殊なものであり、日本文化のみに「独自性」や「優越性」を言うことは不適切であることが主張された。
- (3) フィリップ・ペルティエ（リュミエール・リヨン第2大学〔フランス〕）／極東もしくは日本の中のアジア—メタ地理概念の創生
マテオ・リッチによってもたらされた世界地図が中国を経て日本に移入され、どのように受容され、自国化されたかが語られ、さらにそれと同時に、「亜細亜」、「東亜」、「極東」といったヨーロッパ産の地理概念が、時々の地政学的観点から、むしろ積極的に日本によって用いられていったことが、メタ地理学的手法によって示された。
- (4) サミュエル・ゲー（ジュネーブ大学〔スイス〕）／「東洋」から「北東アジア」へ—日本のアジアへの復帰にむけて？
日本における「アジア」と「東洋」の概念の位置付けの変化を手掛かりに、「近代化された日本」と「発達途上の東洋」という20世紀初頭に生まれた考えが、日本を含まない「東洋」、日本を含む「東アジア」、さらにいずれの国も周辺となり中心の位置を占めない「北東アジア」という考えへと変化することが確認された。
- (5) カリーヌ・マランジャン（ロシア科学アカデミー東洋写本研究所〔ロシア〕）／アジアにおける日本の役割—ソ連とロシアの解釈
ソ連時代とロシア誕生後の日本研究の特徴を概観し、前者においては通時的、歴史的研究が主で、中国文明の強い影響を認めつつ歴史と文学においては「極東」の文脈で日本が捉えられ、また後者では、共時的、同時代的研究が中心となり、政治的、経済的状況、世界とアジアにおける役割、アイデンティティが日本研究の課題となっていることが示された。
- (6) 鈴木裕輔（法政大学〔日本〕）／「日本はアジアの盟主ではない」—石橋湛山による日本の対外拡張主義の批判と中国に対する理解
石橋湛山が経済専門誌『東洋経済新報』で行った日本の対外拡張主義に対する批判を、石橋の中国に対する理解、1910年代から1930年代にかけての国際社会における日本の立場、そして日本の外交政策に対する石橋の評価の3点から検討し、それが日本を、世界そしてアジアに対して、きわめてふさわしく位置づけるものであったことを示した。
- (7) 川田順造（法政大学／神奈川大学〔日本〕、代読：星野勉）／いま福沢諭吉の脱亜論を読み返す
福沢諭吉の「脱亜論」がどのような自国と他国の理解に由来するものであったのか、そこで「脱亜」の後に目指されたものは何だったのかを検証し、この論が、西洋の進歩観を無批判に受け入れ、明治維新を「成功物語」とみなすことから生じており、その「成功物語」のさらなる追求を外に目指すものであったことを明らかにした。そのような「成功物語」に流されない
- ために必要なこととして示されたのは、福沢自身によっても示唆されている、国家と区別される国民の立場である。
- (8) ヨーゼフ・クライナー（法政大学〔日本〕）／日本民族文化の形成におけるアジア諸民族文化との関わり合い—20世紀における日本民族学・考古学の学説を振り返って—
エドワード・モースとヘンリー・フォン・シーボルトによる大森貝塚の発掘に始まる日本の民族学と考古学の歴史を、坪井正五郎、鳥居龍蔵、柳田國男、岡正雄、鈴木尚、金関丈夫、江上波夫、石田英一郎、梅棹忠夫、佐々木高明の日本民族の文化の形成に関する学説を辿りながら検討した。
- (9) アリス・ベルトン（フランス国立東洋言語文化研究所〔フランス〕）／国立民族学博物館と国立歴史民俗博物館で日本を展示する：そこでアジアはどう位置づけられているか
1977年に開館した国立民族学博物館と1983年に開館した国立歴史民俗博物館を対象に、日本の文化的アイデンティティを扱うことを目的とする国立の施設である両館の、自国の歴史を他国との交流の中に位置付ける仕方の違いがどのようなものかを検討した。
- (10) 大貫恵美子（ウィスコンシン大学〔米国〕）／米食・水田はアジア人に共通：アジア人としての日本人の自己意識の誕生から現代まで
『古事記』にも記されたコメの持つ祭祀的な性質を手掛かりに、「外米」に対する敏感な感情と、コメの白さに自らの純粋さを重ね合わせてきた日本人の心性を明らかにするとともに、米食と水田というアジアに共通の要素を持ちながらコメをアイデンティティ確立の手段とした日本人の独自性が考察された。
- (11) 井上亘（北京大学〔中国〕）／「倭」から「日本」へ：日本のアイデンティティとしての二つの国号
702年に国号が従来の「倭」から「日本」に変更された理由を、7世紀白村江の戦いで敗れた日本が置かれた国際的な状況を通して検討するとともに、その後の歴史的な展開も踏まえることで、国号が古代においては外交上の対外的存在であったのが、中世以降になると国内を統括する政治的存在へと変質していったことが指摘された。
- (12) ヴィクトリア・エシュバッハ・サボー（エバーハルト・カール大学テュービンゲン〔ドイツ〕）／上田万年の国語と現代の日本語
上田万年が博言学から出発して「国語」の確立に寄与した歴史上の事実を通して、「国語」と国家の結び付き、言語とアイデンティティの関係、さらに、標準語の確立と日本人のアイデンティティのあり方が、定量的な側面から検討された。
- (13) 王敏（法政大学〔日本〕）／禹王からみた日中および東アジアの文化関係—日本における禹王信仰の調査報告を通して—
現在日本全国に約60件あるとされている、禹の事跡を讃える禹王遺跡を対象とし、日本に

「禹王伝説」がもたらされた経緯と普及の過程を検討するとともに、「禹王伝説」が後世に与えた影響、そして東アジアにおける日本の立場と東アジア諸国との関係の変化が議論された。

- (14) 安孫子信（法政大学〔日本〕）／「哲学」は日本を東洋と西洋との間のどこに位置づけるのか—中江兆民・福沢諭吉・西周一

「日本に哲学なし」と唱えた中江兆民は、中国にも西洋にも「世界観」としての哲学はあったとみなした。西洋哲学の真髄を「自立心」に見た福沢諭吉は、この点では中国よりも日本のほうが西洋に近く、哲学にも近いと考えた。そして日本に文字通りに哲学を導入した西周は、哲学ということで「実証哲学」を考えており、その哲学は中国にも日本にも未だないとみなした。こうして、哲学は中江と福沢にとっては日中を分かちつもの、西にとっては日中を結ぶものだったのであり、そこから西の日中の共同作業の場としての「哲学」の考えが生じたのである。

- (15) 星野勉（法政大学〔日本〕）／近世日本思想における儒教の位置

近世初頭に起きた仏法の王法への従属、徳川幕藩体制になって統治原理として活用された朱子学の導入、それらの傾向への反発から、江戸時代の知識人たちが、儒教を変容させ、国学を登場させることで、精神的に儒学を克服しようとしたことが示された。さらに儒教がそうである外来思想受容排斥の中で、「日本意識」が形成されたことが示された。

- (16) 上垣外憲一（大妻女子大学〔日本〕）／東亜における「唯識三十頌」の翻訳

世親が著した唯識の思想を要約した30の偈頌で、玄奘三蔵が漢訳した「唯識三十頌」を対象に、漢訳された「唯識三十頌」が東アジアの諸国にどのように伝播し、現在に至るまでいかなる影響を与えているかを、三島由紀夫の小説『豊饒の海』やダライ・ラマの教義、ベトナム仏教などを参考にしながら検討した。

- (17) 鈴木聖子（東京大学〔日本〕）／パリ第7大学ドゥニ・ディドロ〔フランス〕／田辺尚雄の「東洋音楽理論／科学的研究」：1920年代の日本音楽研究

音楽学者の田辺尚雄は、朝鮮、台湾、アイヌ、沖縄の各地で行った在来音楽の研究を通して「日本音楽の起源」の探求を行ったことで知られるが、その過程が詳しく検証された。田辺は、こうして日本の音楽の起源を求めるとともに、八重山での調査結果から新日本音楽運動に連なる創作活動にも取り組み、音楽を通じた日本のアイデンティティの確立を試みたのである。

- (18) 宮本圭造（法政大学〔日本〕）／能楽は日本固有の芸能か—能楽の起源をめぐる言説の変遷—

明治維新後に最大の支援者である幕府を失ったことで、能楽は衰退する可能性もあった。しかし、世阿弥の『風姿花伝』や江戸時代の儒学者たちがすでに、明治時代の久米邦武などがその後を追う「起源」に関する議論を通して、能楽は「日本意識の形成」や「アイデンティティの確立」に一定の役割を果たし続けてきた過程

が詳しく考察された。

3. シンポジウムの成果と意義

日本はアジアの一員である。今回のシンポジウムでは、日本のアイデンティティの内側でアジアが占めている比重の問題、あるいは反対に、アジアの中に日本を置いた場合の日本のアイデンティティの問題が、思想、歴史、文学、芸術、社会、政治など多様な側面で、しかも内外の立場から、詳しく検討されていった。日本のアイデンティティをめぐる議論がとかく参照枠も明示されずに、「日本人論」や「日本論」といった閉じた形でなされがちであるのに対して、今回はアジアを軸として置いて吟味が行われ、問題が明確化されたという点で、大変有意義なものであったといえよう。

それでも、日本のアイデンティティとアジア（東アジアに限っても）とは多様な関係を結んでおり、問題も複雑である。ここで仮の整理を行えば問題はたとえば以下の様にまとめられよう。(a) 日本もその一員である東アジアの国々とのような友好関係を、どのように創出していくのか、その創出力にこそ、日本のアイデンティティは発揮されていくであろうという問題（クライン、マランジャン）。(b) そもそもが文明の周縁に位置する日本文化のアイデンティティというのは、絶対的に独自であるという仕方では存在しえず、多くは他から学びつつ、比較的まれに他の側からの学びの対象ともなるという仕方でのみ存在するのであるとし、この後者の側面をこれまでどう生み出してきたのか、今後どう生み出していくのかという問題（湯、クライナー、大貫、井上、王、星野、上垣外、宮本）。(c) 特に近代日本が西洋から全面的に学びつつ、他のアジアに対しては自身が学びの対象となるという捻れの中で、アイデンティティはどういうものであり得たのか、あり得るのかという問題（ベルティエ、鈴木、川田、サボー、安孫子、鈴木）。(d) さらに最近においては、他のアジアに対しても自身が学びの対象になるということが終息しつつあり、そのときアイデンティティはもはや位置付く場所を持たなくなるのではないかという問題（ゲー、ベルトン）。これらの問題に、今後さらなる検討を加え、未来につながる「日本意識」や「日本のアイデンティティ」の姿形を表出させていかなければならない。

以上の学術的成果に加えて、2011年から始まったストラスブール大学日本学専攻の大学院修士課程の学生による聴講が今回も行われ、3日間の会期中に延べ40人以上に達したことも付言しておきたい。修士課程の段階から、自らが専攻する日本研究という分野の最新の学問動向に触れることで、学ぶことに対する意欲形成が促進されることは有意義なことである。また、さらに、今回も日本研究に従事しない一般の方々への聴講があった。国際日本学シンポジウムは研究促進だけでなく、こうして研究活動の社会への還元という面でも、一定の役割を果たしているのである。

【記事執筆】

安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）、
鈴木 裕輔（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”.

2013 Alsace Symposium

International Japanese Studies Symposium: “Asia at the Core of Japanese Identity”

Date: Friday, 1 November- Sunday, 3 November 2013
Sponsors: Hosei University Research Center for International Japanese Studies: HIJAS, L'UMR 8155 Centre de Recherche sur les Civilisations de l'Asie Orientale: CRCAO, Le Département d'études japonaises de l'Université de Strasbourg, Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace: CEEJA
Venue: Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace: CEEJA

The theme of this symposium was “Asia at the Core of Japanese Identity”, and it viewed history, culture, ideology, society and politics from perspectives both in and outside Japan to investigate how Japanese identity has

been determined within its relationship with Asia. Results showed that Asia, in particular China, was the main providing source of new things whenever they were introduced to Japan from ancient to early modern times, and in that sense China played teacher to Japan. Looking beyond this unilateral introduction of culture to search for a cultural, social and political uniqueness within Japan, the issue again becomes one of connection of Japan with China, and the problems of identity arise of “what are Japanese-type things?” and “where does ‘Japanese-ness’ come from?” Issues of language and identity in the Asian sphere, as well as Japanese identity as seen from other Asian countries, have great significance when considering Japanese identity and its relationship with Asia. We hope that future research will provide answers to these questions, and in so doing help explain “Japan-consciousness” and “Japanese identity”. As usual, there was participation from students from Strasbourg University and members of the public. This International Japanese Studies Symposium, then, did not merely give opportunity for research presentations to be shared between its speakers, but achieved an important role in bringing their research activities to society at large.

Report by: Shin Abiko (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor); Yusuke Suzumura (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法④“对日认识”的三角测量——面向未来

2013 年阿尔萨斯研讨会

日本的认同感与亚洲

日期：2013年11月1日（星期五）-11月3日（星期日）
共同举办：法政大学国际日本学研究所、法国国立科学中心东亚文明研究所（Centre de Recherche sur les Civilisations de l'Asie Orientale, Centre National de la recherche Scientifique）、斯特拉斯堡大学人文科学部日本学科、阿尔萨斯欧洲日本学研究所（Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace: CEEJA）
会场：阿尔萨斯欧洲日本学研究所（CEEJA）

在此次题为“日本的认同感与亚洲”的研讨会上，从日本内外的视点出发，以历史、文化、思想、社会、政治

等方面为切入点，对日本的认同感与亚洲的关系进行了探讨。其结果是，亚洲特别是中国对于从古代到近代的日本来说，是其导入先进文化的主要供给源，从此意义上说中国对日本而言是老师一样的存在。另一方面，当日本完成文化导入阶段进入到文化、社会、政治的独立摸索阶段时，日本与中国的关系就成为了课题，“日本式的东西是什么”、“日本独特性的根源是什么”等关于认同感的问题就会产生。另外，在思考日本的认同感与亚洲的关系时，亚洲的范围、语言以及认同感，或者是其它亚洲国家所观察到的日本的认同感都是十分重要的问题。今后，通过对这些问题的更进一步讨论，希望能够实现“对日意识”、“日本的认同感”等问题的解答。此次会议不仅仅是报告者的研究发表，还吸引了斯特拉斯堡大学的学生以及一般听众的参与，在研究活动的社会反馈层面上也起到一定作用。

【执笔者：

安孙子 信（法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授）、
铃村 裕辅（法政大学国际日本学研究所客座学术研究员）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년 ~2014년)
국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래
연구④ <일본의식>의 삼각측량-미래로

2013년 알자스 심포지엄

국제일본학 심포지엄 ‘일본의 아이덴티티와 아시아’

일 시: 2013년 11월 1일(금)~11월 3일(일)

공 동 개 최: 호세이대학교 국제일본학연구소, 프랑스 국립과학센터 동아시아문명연구소(Centre de Recherche sur les Civilisations de l'Asie Orientale, Centre National de la recherche Scientifique), 스트라스부르 마르크 브로크 대학교 인문과학부 일본학과, 알자스 구주 일본학연구소(Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace: CEEJA)

장 소: 알자스 구주 일본학연구소(CEEJA)

이번 심포지엄에서는 ‘일본의 아이덴티티와 아시아’라는 주제로 일본 국내외의 관점에서 역사, 문화, 사상, 사회, 정치 등을 통해 일본의 아이덴티티가 아시아와의

관계 속에서 어떻게 규정되어 왔는지 검토했다. 그 결과, 아시아 특히 중국은 고대에서 근세까지의 일본이 첨단 문물을 도입하는 데 주된 공급원이었으며 그런 의미에서 중국은 일본에게 스승과 같은 존재였다. 그리고 일방적으로 문물을 도입하던 단계를 거쳐 문화적, 사회적, 정치적으로 독자적인 방향을 모색하는 단계에 이르자, 일본 내부에서는 중국과의 관계가 문제시 되었고, ‘일본적인 것은 무엇인가?’, ‘일본다운 것은 어디에서 기인하는가?’라는 아이덴티티 문제가 발생했다.

한편 아시아의 범위, 언어와 아이덴티티 문제, 또는 다른 아시아 국가들이 본 일본의 아이덴티티는 일본의 아이덴티티를 아시아와의 관계에서 생각할 때 중요한 의미를 갖는다. 앞으로 검토를 거듭해 이러한 문제에 대한 답을 찾아감으로써 ‘일본의식’과 ‘일본의 아이덴티티’가 밝혀지기를 기대한다.

이번 심포지엄에도 스트라스부르 대학교의 학생과 일반인들도 참석했다. 이런 점에서 볼 때 국제일본학 심포지엄은 보고에 의한 연구 발표뿐만 아니라 연구활동의 사회화원이라는 측면에서도 일정한 역할을 하고 있다

【보고자:

아비코 신(安孫子信, 호세이대학교 국제일본학연구소 소장, 교수), 스즈무라 유스케(鈴村裕輔, 호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원)】



報告者: アンドレ・クライン氏
(アルザス欧州日本学研究所 [フランス])



報告者: 井上 亘氏 (北京大学 [中国])



報告者: 宮本 圭造氏 (法政大学 [日本])



会場の様子

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
アプローチ①「＜日本意識＞の変遷―古代から近世へ」

ワークショップ

和の国？武の国？神の国！？

——江戸から見る日本人の自国認識の変容

● 日 時：2014 年 3 月 15 日（土）13：30～17：45
2014 年 3 月 16 日（日）10：00～16：00

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 80 年館 7 階 会議室〈角〉

● 司 会：田中 優子（法政大学国際日本学研究所所員、社会学部教授）
横山 泰子（法政大学国際日本学研究所所員、理工学部教授）
小林ふみ子（法政大学国際日本学研究所所員、文学部准教授）

去る 2014 年 3 月 15・16 日（土・日）の両日、アプローチ①「＜日本意識＞の変遷」のワークショップ「和の国？武の国？神の国！？——江戸から見る日本人の自国認識の変容」を実施した。最終年度を迎えるにあたって、これまでアプローチ①の研究のなかで浮かび上ってきた主な論点を網羅的にふり返って、研究のまとめをにらんで不足している部分を補いながら、全体として何が見えてくるのかを考えようというのが今回の趣旨であった。

初日のセッション【I】は「自国」を誰が／どの範囲で捉えるか」として「自国」認識にまつわる基本的課題を共有した。はじめに、アプローチリーダーの田中優子氏（法政大学）が、領域、対外意識、危機と国難、華夷秩序と都鄙構造、裏と表といった観点からこの研究の見通しを示し、その今日的意義を論じた。続いて、米家志乃布氏（法政大学）による「人びとにとっての近世日本のかたち」では出版図を中心に検討を行い、江戸と上方で普及した地図の精度の差、また大黒屋光太夫の日本図を例に節用集などの日用書類の影響力の大きさなどの興味深い論点が指摘された。横山泰子氏（法政大学）は、アイデンティティ・帰属意識と国との距離感の多様性を論じる旧稿「ナショナルか、ローカルか、もしかしてネイティブ？」を紹介するとともに、「怪物ではない＜日本の私＞——『和漢三才図会』の外夷人物をめぐって」と題して、東アジア漢字文化圏の外に広がる「外夷」を他者として、その内側の文明の帰属する、奇異でない「自分たち」という自己認識のあり方を指摘した。大木康氏（東京大学）の「華夷意識が無限に作り出す「夷」の存在」は、中国において確立された華夷意識のもともとのあり方について確認したのち、そういう認識の相対性とそこにおける日本の位置、それが国内においても都鄙構造のなかで連鎖する関係についても論じた。中国を専門とする大木氏との質疑においては、「神州」としての自国認識は中国にもあること、また日本刀など武器への美術工芸品的関心に、東アジアでいえば日本の特異性がある可能性の指摘などもあり、今後のさらなる課題として残された。

セッション【II】は「周縁」を／からみる」として、「みちのく」と琉球からの視線、それらと日本認識の問題を考察した。津田真弓氏（慶應義塾大学）の「みちのく」からのまなざし」では、外国船来航などによって対外的な危機意識の高まる 19 世紀初頭に仙台

藩で作られた新作能『神皇』を素材として、その時代に日本と仙台藩を二重写しにして造型する意識について考察が加えられた。ヤナ・ウルバノヴァー氏（法政大学）の「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」では、17 世紀諸島の薩摩侵攻以前の琉球の歌謡オモロとそれ以後の琉歌において「大和」の描かれ方に顕著な相違が見られることが明らかにされた。内原英聡氏（法政大学）の「近世琉球人は日本をどう見たか」では、近世琉球の人びとの身分階層、立場、琉球王府との距離などさまざまな要因によって見え方が異なるという問題の複雑性が指摘された。小林ふみ子（法政大学）「支え」にされた琉球」では、琉球が、従来指摘されてきたように政治レベルで日本型華夷意識を支える朝貢国と位置づけられてその行列が民衆への示威に利用されたというだけでなく、それを受け止める人びとの側でも「日本に憧れる琉球」の物語が享受されたことを論じた。

二日目のセッション【III】は「和」の国・「武」の国イメージの普及」。竹内晶子氏（法政大学）の「謡が広めた豊かで平穏な国のイメージ」では、世阿弥の「幽玄」において日本的であることがいかに重要であったかということ、そこで行われた平穏な国としての表現が近世日本に大きな影響力をもったことが論じられた。小林ふみ子「和」らかな色好み＝好色の国」では、「和国」という文字が「色好み」の王朝文学の古典化と結びついて好色を国風とする近世中期以降の通俗神道の言説が説得力を持つに至ったことを提示した。また韓京子氏（慶熙大学校）の「浄瑠璃による「武国」イメージの流布」では、対外関係を意識したときに近世前期のある時点までは「知恵の国」という表現が先に立っていたところに、徐々に神功皇后や三種の神器のうちの剣の威力の逸話などによって「武国」イメージが強化されたことを指摘した。さらに金時徳氏（ソウル大学校）による「異国戦記と武国日本の可視化」では、いわゆる朝鮮軍記物の系譜に連なる作品群を例として、とくに 19 世紀に入って挿絵の戦闘場面の増加と血生臭さの強調が顕著になることを具体的に提示した。大屋多詠子氏（青山学院大学）「曲亭馬琴の日本魂と「武の国」」では、馬琴作品における「日本魂」の用例を検証して忠孝との関連を確認したうえで、漢を排斥する国学者とは異なって儒仏一致の思想のうえにたって双方を肯定し、武国日本の、文国中国からの文明移入を

儒仏肯定に援用したと論じた。このセッションの議論では一見相反するかのような平穏な「和の国」イメージと、武士の武威によって統治される「武の国」言説が、武による和の実現という文脈でつながっていくことが確認されたことも重要であった。

セッション【Ⅳ】「神の国」―近代をつくった自国認識の登場―では、まず林久美子氏（京都橘大学）による「浄瑠璃による神国意識の普及」が、近松門左衛門以前の古浄瑠璃の時代からみられる記紀神話に取材した演目の数々は、金平浄瑠璃と同様に、当時の観客の嗜好を意識したものだと考えられることを指摘し、そこに間接的に山崎闇斎の垂加神道の影響力が見られることを論じた。福田安典氏（日本女子大学）の「平賀源内と「神国」」では、源内が士分にある者として表向きは林家の思想に立ちながら、谷川士清に私淑して日本神話と古代中国の伝説の習合を否定する、国学的な考えをもっていたことを指摘した。川添裕氏（横浜国立大学）の「開国期の神さまと異国形象」では、当時の不安な心性のネガとして異形の異国人物の見世物がもてはやされたこと、そこでは異国の具体的な軍事的脅威という圧倒的な非対称の関係に対して、いわば異次元の、想念のレベルで「神の国」として対抗し、その非対称を解消しようとする意識を提示した。横山泰子氏の「国難と神国思想」では、自然災害を「神軍（かみいくさ）」として捉える思想を指摘、かつての蒙古襲来の記憶「ムクリコクリ」という名で恐ろしいイメージとして

残ったこと、安政のコレラ流行が対外的な危機と結びつけられて理解され、それに対応して単数の神ではなく、あらゆる神々がいわば総動員されたことを鑑み、神国思想は単数の「神の国」ではなく「神々の国」という理解が一般的であったことが論じられた。このセッションでは、神国思想を単純に神道や国学の枠で理解するだけでなく、儒学や仏教、民俗信仰との関係のなかで検討し直す必要、また時期による変容を考える必要が浮かび上がった。

全体討論のなかでは、上記に加え、いくつかの未検討課題が浮かび上がった。まずは地域性をどう考えるかという課題である。これまで考えてきた東北の問題だけではなく、とくに上方では、幕府との距離感や出版業のあり方など江戸とは違った認識が見られるはずで、その検討の必要が論じられた。また、対外的な危機だけでなく、改革政治の動向の影響、ジェンダーや身分階層による差異の研究、神儒仏だけでなく道教的信仰の影響はないのかという問題などが指摘された。

このワークショップでは、今後の課題も含め、日本をめぐる意識の多様性、それをもたらす要因の複雑さが浮かび上がった。研究のまとめに向けて、大きな弾みとなったと考えている。

【記事執筆：小林 ふみ子

（法政大学国際日本学研究所所員、文学部准教授）】



3月15日（土）会場の様子



3月16日（日）会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
 “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
 Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

Workshop

“Land of Peace? Land of Warriors? Or Land of Gods!?: Changes of Consciousness for Own Country Held by the Japanese People in the Edo Period”

Date: Saturday, 15 March 2014, 13:30-17:45 – Sunday, 16 March 10:00-16:00
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '80 Building 7th Floor Conference Room
 Chair: Yuko Tanaka (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University),
 Fumiko Kobayashi (Associate Professor, Faculty of Letters, Hosei University),
 Yasuko Yokoyama (Professor, Faculty of Science and Engineering, Hosei University)

A workshop for Approach 1, “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”,

entitled “Land of Peace? Land of Warriors? Or Land of Gods: Changes in Consciousness of Own Country Held by Japanese People in the Edo Period” was held over 2 days, Saturday 15-Sunday 16 March 2014. As this research project reaches its final year, our aims on this occasion were to return to each of the main arguments arisen from Approach 1 research to date, to supplement the missing pieces needed to draw our research conclusions, and to consider what we can see overall.

We heard 17 reports and ensuing debate during the 4 sessions: (I) By whom/ in what spheres is “own country” understood?, (II) Viewing [from] the “periphery”, (III) Circulation of the images of “Land of Peace” and “Land of Warriors”, and (IV) “Land of Gods”: emergence of a perception of “own country” that shaped the modern period. We saw how a sense of unity developed in the consciousness of own country had by pre-modern Japanese people due chiefly to publishing media, but at the same time there were differences and diversity according to region, period and other circumstances. Also, there was a logical connection between what at a glance appeared to be the contradictory theories of “Land of Peace” and “Land of Warriors”: a peaceful future brought about by military glory.

Report by: Fumiko Kobayashi (Associate Professor, Faculty of Letters, Hosei University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法① “‘对日认识’의变迁——从古代到近代”

研讨会

和之国? 武之国? 神之国? —从江戸看到的日本人自我意识的变迁

日 期: 2014年3月15日(星期六) 13:30-17:45
 2014年3月16日(星期日) 10:00-16:00
 会 场: 法政大学市谷校区80年馆7层会议室 “角”
 主 持: 田中 优子(法政大学社会学部教授)
 横山 泰子(法政大学理工学部教授)
 小林芙美子(法政大学文学部准教授)

2014年3月15日·16日(星期六·星期日) 研究方法①举办了题为“和之国? 武之国? 神之国? —从江戸看到的日本

人自我意识的变迁”的研究会。由于今年是该项目的最后一年，所以此次会议的主旨是，对到目前为止研究方法①中出现的主要论点进行网罗性回顾，对不足的地方进行补充，并从整体上对所发现的问题进行思考。会议分为四个部分：【I】“本国”是谁在怎么样的范围内确立的、【II】从哪里出发对“周边”观察、【III】“和之国”·“武之国”印象的普及、【IV】“神之国”——创造了近代的本国意识的登场。会议上的17篇报告首先明确了近代日本人的本国意识，特别是通过出版媒体而形成的一体感的情况。其次由于地域、时期、状况的不同，差异与多样性也是存在的。最后，“和之国”与“武之国”貌似相互矛盾，但由武力和威严来实现和平的将来这样一种逻辑性联系也是存在过的。

【执笔者：小林 芙美子(法政大学文学部准教授)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)
 국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토—<일본의식>의 과거·현재·미래
 연구① <일본의식>의 변천—고대에서 근대로
 워크숍

和의 나라, 武의 나라, 神의 나라!?—에도에서 보는 일본인의 자의식 변용

일 시: 2014년 3월 15일(토) 13:30~17:45
 2014년 3월 16일(일) 10:00~16:00
 장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 80주년관 7층 회의실 ‘角’
 사 회: 다나카 유코(田中 優子, 호세이대학교 사회학부 교수)
 요코야마 야스코(横山 泰子, 호세이대학교 이공학부 교수)
 고바야시 후미코(小林 芙美子, 호세이대학교 문학부 준교수)

2014년 3월 15일(토), 16일(일) 이틀간 연구① 일본

의식의 변천 워크숍 ‘화(和)의 나라, 무(武)의 나라, 신(神)의 나라!?—에도(江戸)에서 보는 일본인의 자의식 변용’을 실시했다. 연구 프로젝트의 마지막 연도를 맞이하여 지금까지 연구①에서 다루어진 각각의 연구를 통해 부각된 주요 논점을 망라해 되돌아보고, 연구 결과의 요지를 바탕으로 부족한 부분을 보충하면서 전체적으로 무엇이 보이는지를 생각해 보는 것이 이번 워크숍의 취지였다.

4개의 섹션 [I] ‘자국’을 누가/ 범위를 어디까지 할 것인가, [II] ‘주변(周縁)’을/주변에서 보기, [III] ‘화(和)’의 나라, ‘무(武)’의 나라 이미지의 보급, [IV] ‘신(神)’의 나라—근대를 만든 자국인식의 등장 등 17건의 보고와 토론을 통해 근세 일본인의 자국인식에 있어, 주로 출판 미디어를 통해 일체감을 양성하는 모습과 한편으로 그 모습에도 지역, 시기, 상황에 따른 차이와 다양성이 있다는 점, 또한 ‘화(和)의 나라’와 ‘무(武)의 나라’처럼 모순된 듯 보이는 언설 속에도 무위(武威)에 의한 화(和)의 미래라고 하는 논리적 관련성이 있다는 점 등이 밝혀졌다.

【기사집필: 고바야시 후미코(호세이대학교 문학부 준교수)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討―〈日本意識〉の過去・現在・未来
アプローチ①「〈日本意識〉の変遷―古代から近世へ」

第 2 回みちのくワークショップ近代篇

近代東北が見た〈日本〉

- 報告者：河西 英通（広島大学大学院文学研究科教授）
- 日 時：2013 年 11 月 15 日（金）18：30～21：00
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー 25 階 B 会議室
- 司 会：小口 雅史（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）

東北が語られるとき、「貧しさ」は避けられない。しかし、問題はいかに貧しいかではなく、いかにして貧しいかということである。自然的宿命的な説明ではなく、人為的政策的な説明が求められる。本報告では、従来、東北が総じて〈見られる〉側であっても、〈見る〉側ではなかったこと、歴史的存在としては従属変数的位置にあったことを重視して、近代東北からどのような〈日本〉が見えてくるのかを明治維新から戦後まで史料に沿って追ってみた。

「白河以北一山百文」は極度に東北を侮蔑したフレーズだが、反発も見られた。たとえば、自由民権運動期に『奥羽新報』はいつの日か「西南の一山百文」となる日が来るだろうと予測したし（1881 年 1 月 22 日「東北新報の論説を読む」、日清戦争期の『東北少年』は「復讐的思想」を隠そうとはしなかった（1895 年 1 月 1 日「維新前に於ける東北の形勢を論じ併せて其将来を卜す」ほか）。それは第二維新への期待でもあった。第二維新論は反藩閥政府の思想として広く見られたが、東北発の第二維新論はあくまでも東北人を主体とするところに特徴がある。福島県出身の著名な民権家河野広中の主張をはじめ、青森県の『東奥日報』などにも数多くの東北発の第二維新論が見られる（1889 年 8 月 3-10 日「東北団結論」ほか）。

強い使命感は「東北精神党」の結成にもつながった。『岩手公論』によれば、岩手・青森・福島・新潟各県の有志によって盛岡を本部に結成された東北精神党は「東北の志士を以て結合し、朝野の藩閥を攻撃し、以て自由平等の大義を明にするものとす」「実利に基づき、実業上其他百般の事柄に付き、東北人士固有の責任を全ふせんことを務むるものとす」との目的をもっていた（1890 年 12 月 9 日「東北精神党」）。さらに国際的な視野における自己認識を生んだ。『東北健児』は東北＝スコットランド論を示しているが（1897 年 10 月 21 日「東北大勢論」）、より鮮明に東北はスコットランドを見習えと主張したのは明治期を代表する言論人陸羯南である（『日本』1901 年 10 月 3 日「北日本と北英国」）。

強い使命感と東北振興の熱意は 20 世紀に入っても続く。盛岡出身の歴史家原勝郎は「既に新文明の余弊も生じて居るが、此明治の新文明は、主として南人の手によつたものであれば之を救済するのは北人の天職である」とのべ（『岩手日報』1911 年 1 月 1 日「北人の天職」）、創刊された『東北評論』は明治維新以後の政治経済状況を挽回する東北振興の必要性を訴えた（1917 年 1 月「発刊之辞」）。しかし、東北も同質一体ではなかった。「一口に東北人と言ふと雖ども、盛岡

人と仙台人との性情の差異は、必ずしも盛岡人と鹿児島人との差異より近しとは言ふべからず」とは石川啄木の弁だが（『岩手日報』1909 年 10 月 6 日「百回通信」）、北端の青森では「青森県は世界中の資本国に於て、最も文化の程度の低いと言はれてゐる日本国の中でさへ問題にならない野蛮国だと言はれてゐる。お恥かしい話だが本当だから仕方がない」と語られ（『胎盤』1922 年 1 月「胎盤雑記」）、豪雪地帯山形県選出の代議士松岡俊三からは「雪国解放」が叫ばれた（『惨酷を極むる雪害地の地租解剖』1931 年）。

東北から見た〈日本〉には民族問題と植民地問題があったことも重要である。民族問題とはアイヌ史である。戦間期における青森県出身の芸術家秋田雨雀の認識は象徴的である。彼は北東北におけるアイヌ史の存在に言及して、「私達の生れた国がどんなに日本の中心から遠ざかつたところにあるかといふこと」を指摘している（『西北新報』1937 年 1 月 1 日「アイヌ人種に聞はれた話」）。しかし他方では同じく青森県出身の詩人副土幸次郎が津軽地域をもって「日本中央に連関する極限地帯」とみなしている（『郷土と観念』1942 年）。つまりアイヌ民族の存在をどう東北史に組みこむかで、まったく異なる〈日本〉像が描かれているのである。植民地問題とは東北からの満蒙移民問題であり、この過程で東北人＝蝦夷論が否定され、逆に大和民族論を設定することで、東北人＝「開拓の戦士」イメージが提唱されている（『東北人と大東亜的発展』1942 年）。東北にとって、アジア・太平洋戦争とは「生命体としての日本」（『青森県文化』1942 年 4 月「青森県文化運動の新発足に当りて」）「純日本としての東北」（山口弥一郎『東北の村々』1943 年）「アジアの東北」（『月刊東北』1945 年 1 月「新しき郷土」神保光太郎）の発見の契機であり、東北と〈日本〉が一体化した時間であった（『東奥日報』1944 年 9 月 24-27 日「戦争と地方文化」）。そうした至福は 8・15 を境にいったん解体無化するが、新生日本建設に向けて東北は再び「枢軸」「根本」の位置につく（『東北文庫』1946 年 1 月「混沌の中に立つ者」森嘉兵衛、『青年ふくしま』1947 年 4 月「郷土の青年諸君へ」鈴木安蔵）。東北論は戦後経済復興に引き継がれ、植民地を失った日本の資源供給地として東北は急速にクローズアップされる（1951 年東北開発研究会、1956 年東北開発三法、1961 年東北経済開発センター）。その究極が 3・11 によって露呈した「国内植民地」「原発植民地」としての東北であっただろう。

【記事執筆：河西 英通（広島大学大学院文学研究科教授）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

2nd Michinoku Workshop (Modern Era)

“Japan” Seen from Modern Tohoku

Speaker: Hidemichi Kawanishi (Professor, Department of Integrated Humanities, Graduate School of Letters, Hiroshima University)

Date: Friday, 15 November 2013, 18:30-21:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25th Floor Conference Room B

Chair: Masashi Oguchi (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

There must be more stories and depictions of Tohoku than of any other region. It continued to be the target of discrimination and subjugation as a backward and unenlight-

ened region. There has been plenty of research “looking at Tohoku”, but very little with Tohoku as first person; in other words, “seen from Tohoku”. In this presentation I decided to pursue the image of “Japan” seen from Tohoku from the Meiji Period up until the Post-war Period. It should be noted that 1) I limited myself to discourse emanating from Tohoku soil, 2) I focused as much as possible on anonymous discourse, and 3) I was careful of the influence of conflicting discourses caused by twists in a discourse that could even appear concurrently. To generalize, I introduced an image of “Japan” highlighted from various perspectives, whilst emphasizing the diversity and multi-faceted nature of Tohoku. Tohoku itself has in no way continued to submit to varying levels of subordination from “Japan”. Tohoku has come to talk of “Japan” in the first person. Since 3.11, we have discussed Tohoku, but maybe we should ask the questions, how does the “Japan” of today look from Tohoku, and what has happened to the image of “Japan” today?

Report by: Hidemichi Kawanishi (Professor, Department of Integrated Humanities, Graduate School of Letters, Hiroshima University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法① “‘对日认识’的变迁——从古代到近代”

第2次陆奥研究会近代篇

近代东北所观察到的“日本”

报告者: 河西 英通(广岛大学大学院文学研究科教授)

日期: 2013年11月15日(星期五) 18:30-21:00

会场: 法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室

主持: 小口 雅史(法政大学国际日本学研究所所员、文学部教授)

像日本的东北地区一样被谈及和被描绘的地域可能绝无仅有。东北作为落后的、未开发的地区,一直以来都受到了差别及抑制的对待。虽然关于“被观察的东北”

的研究已经存在,但将东北作为主语,也就是“观察的东北”的研究并不多见。此次报告以近现代(从明治维新到战后)为时代限定,对东北所观察到的“日本”的姿态进行了探索。其中需要留意的有以下几点:第一,以从东北地区发出的言论为对象;第二,尽量着眼于没有名气的作者的言论;第三,对于隐晦含蓄且与时代不符的言论要尤为注意。总体来说,报告在强调东北的多样性·多元性的同时,对各种视角中所反映的“日本”的姿态进行了介绍。不是将东北仅仅作为“日本”的从属变量,而是将东北作为主语来谈论了“日本”。3·11之后我们对东北作了很多讨论,但现在的东北是如何看待“日本”的、现在的“日本”又变成了一种怎样的姿态也是不得不重新审视的问题。

【执笔者: 河西 英通(广岛大学大学院文学研究科教授)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년 ~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구① <일본의식>의 변천-고대에서 근세로

제2회 미치노쿠 워크숍(근대편)

근대 도호쿠 지역에서 본 일본

보고자: 가와니시 히데미치(河西 英通, 히로시마(広島)대학교 대학원 문학연구과 교수)

일시: 2013년 11월 15일(금) 18:30~21:00

장소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실

사회: 오구치 마사시(小口 雅史, 호세이대학교 국제일본학연구소 연구소원, 문학부 교수)

발전이 늦은 지역, 미개 지역으로 차별과 억압의 시선을 받아온 도호쿠(東北)지역. 이곳 만큼 사람들 입에 오르내리고, 묘사된 지역도 없을 것이다. 이런 도호쿠지역에 대한 연구는 그렇게 ‘보이는 도호쿠’라는 시점에서 이루어져 왔으나, ‘도호쿠’를 주어로 하는, 즉 ‘도호쿠를 보는’ 연구는 많지 않다.

이번 보고는 시대를 근현대(메이지유신부터 전후까지)로 정하고 도호쿠지역에서 본 ‘일본’의 모습을 추적해 보고자 했다. 특히, 도호쿠지역 소재지에서 발신된 언설(言説)을 대상으로 할 것, 가능한 무명 집필자의 언설에 주목할 것, 동시대임에도 우여곡절로 인해 상반되는 언설이 공존할 수 있다는 것 등을 염두에 두고 연구에 임했다.

대부분 도호쿠지역의 다양성·다원성을 강조하면서 다양한 관점에서 바라본 ‘일본’의 모습이 소개되었다. 도호쿠지역은 ‘일본’의 종속변수로 만족해 온 것이 아니라, ‘도호쿠’를 주어로 ‘일본’을 말해 왔던 것이다. 3·11 동 일본대지진 이후 우리는 도호쿠지역에 대해 이야기하고 바라보고 있지만, 도호쿠지역이 지금 ‘일본’을 어떻게 보고 있는지를, 지금 ‘일본’의 모습은 어떠한지를 다시금 되짚어봐야 할 것이다.

【기사집필: 가와니시 히데미치

(히로시마대학교 대학원 문학연구과 교수)】



報告者: 河西 英通氏 (広島大学大学院文学研究科教授)

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
アプローチ①「＜日本意識＞の変遷―古代から近世へ」

第 2 回研究会

地獄草紙のカリカチュアとしての勝絵

- 報告者：出口 弘（東京工業大学大学院総合理工学研究科教授）
- 日 時：2013 年 12 月 20 日（金）18：30～21：00
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー 25 階 B 会議室
- 司 会：田中 優子（法政大学国際日本学研究所所員、社会学部教授）

2013 年度第 2 回研究会は、東京工業大学大学院総合理工学研究科教授の出口弘氏を迎え、「地獄草紙のカリカチュアとしての勝絵」と題して行われた。

出口氏はエージェントベース社会システム科学、社会シミュレーション及び主体を含む複雑系、進化経済学、ゲーミングシミュレーションを主たる専門とし、文科系、理科系という枠組みを超えた、「文理融合型研究」の実践に取り組んでいる。主著に『複雑系としての経済学』（2000 年）、*Economics as an Agent-Based Complex System* (2004) などがある。

今回は、鳥羽僧正覚猷が作者に擬せられている勝絵を、出口氏が近年取り組んでいるコンテンツ論の観点から検討し、勝絵の構造や思想史的な特徴が分析された。

報告の概要は以下の通りであった。

鳥羽僧正覚猷が作者に擬せられている勝絵の内容は、一般に「陽物くらべ」と「放屁合戦」に分けられている。勝絵は、平安時代から幕末に至るまで絵画の分野に大きな影響を与え、多くの派生的な絵巻が作成された。しかしながら、歴史的な解釈は定まらず、卑猥で尾籠な絵巻として各種の議論を引き起こしてきた。また、覚猷は『鳥獣人物戯画』の作者にも擬されているため、勝絵と『鳥獣人物戯画』との関連性の有無にも注意する必要がある。そこで、今回は実物資料に基づき文化的、思想史的な観点から勝絵の解釈を行う。今回の報告では、早稲田大学図書館、圓満院、サントリー美術館、報告者自身の所蔵する勝絵 13 種を題材とする。

勝絵は尾篋で卑猥とされ、確かに男女の裸体は描かれているものの、性的な描写はない。これは、勝絵がエロティックなものではなく、裸体の人物が彷徨する姿が描かれた地獄草紙のパロディであることを示唆する。このように考えると、勝絵の「陽物くらべ」と「放屁合戦」は、地獄草紙における「地獄の入り口での閻魔大王の審判」と「地獄の責め苦」を手本にし、勝絵と地獄草紙は一体をなしていると理解できる。また、勝絵と並び覚猷の作とされる『鳥獣人物戯画』も畜生道のパロディといえる。このように、勝絵も『鳥獣人物戯画』も、実在する場所ではなく精神のあり方としての地獄の様子を示すための風狂の精神に満ちた絵巻であると解釈できる。さらに、勝絵の構造については、従来の「陽物くらべ」と「放屁合戦」に先立ち、「服を着た群衆が追い立てられる」という第三の部分を含め、三部構成と考えることが妥当といえるだろう。

平安時代から幕末に至るまで様々な派生的な絵巻が作成された勝絵については、「大正十二年晩秋」の

記載のある、「陽物くらべ」だけを模写した巻物が作られている。大正時代の写本は最後の場面に「放屁合戦」の最初の場面が描かれており、模写の手本には「陽物くらべ」と「放屁合戦」が含まれていたことが推定される。また、勝絵には、絵師の工房で作成する絵の手本となるべき写本である粉本の存在することが確認されている。

ところで、勝絵には各種の二次創作がある。例えば、サントリー美術館の所蔵品は「放屁合戦」を中心として描いており、室町時代の作と考えられ、放屁が中心的な話題となる絵巻物『福富草紙』の影響を受けていることが推測される。あるいは、菱川師宣の作と伝えられる勝絵は、男女が混合で放屁合戦を行う、騎乗で放屁が行われている、陽物くらべがない、裸体の場面が少ない、という、古写本にはない特徴を備えており、師宣の真作であるかは分からないものの、趣向からは江戸時代の作品と思われる。また、皿回しなどの曲芸の描写も、二次創作の一つの典型である。

最後に、思想史的観点から勝絵を分析すると、勝絵は風狂思想に基づく絵巻といえる。すなわち、現世に生をうけたものは、善悪の行為によって六種の世界（六道）を輪廻する宿命を免れえないとする仏教の因果応報の思想に基づく六道絵、地獄の様子を描いた地獄草紙、飢えと渇きに悩みながら人間界に出没する餓鬼の諸相を描いた餓鬼草紙のパロディとし、地獄の実在を説く源信の『往生要集』に対抗して作られたのが勝絵なのである。しかし、地獄の実在が信じられた平安時代に比べ、室町時代になると地獄が精神的な側面で恐怖の対象になるという「地獄像の変遷」が生じたため、勝絵に対する人々の理解も変化したことは、本来一体であった「陽物くらべ」と「放屁合戦」が二次創作の中では「陽物くらべ」を中心とする作品と「放屁合戦」を取り上げる作品とに二分化した。そして、明治初期に絵金や河鍋暁斎による二次創作を最後に、勝絵の系譜は日本の絵画史の中から表面上は途絶えることになったのであった。

本報告では、しばしば否定的な観点から眺められやすい勝絵を、構造分析と思想史的な考察によって検討することで、中世から近代に至る人々の意識の変遷が追究された。勝絵という視覚資料の分析の方法を含め、「日本意識」を考える上でも、出口氏による報告は意義深いものであった。

【報告記事執筆者：鈴木 裕輔

（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）、

報告記事監修：田中 優子

（法政大学国際日本学研究所所員、社会学部教授）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

2nd Research Meeting

Kachi-e as Caricature of *Jigoku-zoshi*

Speaker: Hiroshi Deguchi (Professor, Department of Computational Intelligence and Systems Science, Tokyo Institute of Technology)

Date: Friday, 20 December 2013, 18:30-21:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25th Floor Conference Room B

Chair: Yuko Tanaka (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

Kachi-e (paintings of fight scenes) assumed to be the work of Toba Sojo Kakuyu have been the focus of Professor Hiroshi Deguchi in recent years. On this occasion he examined *kachi-e* from the perspective of his theory of content, analysing their structure and characteristics of

historical thought. He explained that although they had influence upon the fields of painting from the Heian Period to Bakumatsu, and many derivative *kachi-e* were produced, no proper historical commentary exists. Various debates have labelled *kachi-e* as indecent and indelicate, yet we saw how they presented scenes of hell (*jigoku*) which intended to instill fear. Compared to the Heian Period when people believed in the actual place of hell, in the Muromachi Period there emerged a psychological aspect to hell focusing on fear: “transformations in the image of hell” that brought about changes in people’s understanding of *kachi-e*. The presentation thus traced transformations in people’s consciousness from the middle ages to the modern era by conducting a structural analysis and ideological consideration of *kachi-e* – all too often viewed dismissively. In the methods used to analyse the visual material of *kachi-e*, Professor Deguchi’s presentation proved deeply significant for considering “Japan-consciousness”.

Report by: Yusuke Suzumura (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies); report overseen by Yuko Tanaka (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法① “‘对日认识’的变迁——从古代到近代”

第2次研究会

作为地狱草纸讽刺画的胜绘

报告者：出口 弘（东京工业大学大学院综合理工学研究科教授）

日期：2013年12月20日（星期五）18:30-21:00

会场：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室内

主持：田中 优子（法政大学社会学部教授）

此次报告上，出口弘教授从近年所致力于的信息论的观点出发，对鸟羽僧正觉猷的胜绘（以比赛为主题的画）进行了讨论，并对胜绘的构造和思想性特征等进行了分析。其结果是，胜绘对从平安时期到幕末的绘画领域产生了很

大的影响，但多种派生性画卷在被创作的同时，对于其历史性的解释却并没有被确定下来。猥琐而粗俗的画卷引起了各种议论，为了展示作为恐怖对象的地狱的模样是其中的一种解释。此外，比起相信地狱真实存在的平安时代，室町时代的地狱成为了精神层面上恐怖对象，“地狱像的变迁”的出现正好说明了这一点，从此可以看出人们对于胜绘的理解也是有变化的。胜绘常常被人们从否定的观点来观察，而本次报告通过对其构造分析及思想史的考察，对从中世纪到近代的人们的意识变迁进行了探究。包括对胜绘这样的视觉资料的分析方法在内，出口教授的此次报告对于“对日意识”的思考有着很深的意义。

【执笔者：铃村 裕辅

（法政大学国际日本学研究所客座学术研究员）、

报道监修：田中 优子（法政大学社会学部教授）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구① <일본의식>의 변천-고대에서 근대로

제2회 연구회

지옥초지(地獄草紙)의 캐리커처 ‘가치에’

보고자: 데구치 히로시(出口 弘, 도쿄공업대학교대학원 종합 이공학연구과 교수)

일 시: 2013년 12월 20일(금) 18:30~21:00

장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실

사 회: 다나카 유코(田中 優子, 호세이대학교 사회학부 교수)

이번에는 데구치 히로시 교수가 최근 연구하고 있는 콘텐츠론의 관점에서 도바소조 가쿠유(鳥羽僧正覚猷)가 그린 것으로 보이는 가치에(勝絵, 승부를 그린 그림)를 검토하고 그 구조와 사상사적 특징을 분석하였다. 그 결과, 헤이안(平安) 시대부터 에도막부(江戶幕府) 말기까지 회화 분야에 큰 영향을 미친 가치에는 많은 에마키(絵巻, 두루마리 그림)가 파생적으로 생겨나는 가운데 역사적 해석이 이루어지지 않아 외설스럽고 추잡한 이미지의 에마키로서 다양한 논의를 불러일으켰다. 또한, 공포의 대상으로서 지옥의 모습을 그려내기에 충분한 에마키라고 해석되기도 했다. 실제로 지옥이 있다고 믿었던 헤이안 시대와 달리 무로마치(室町) 시대가 되면 지옥이 정신적인 측면에서 공포의 대상이 된다는 ‘지옥상

(像)의 변천’을 통해 가치에에 대한 사람들의 생각도 변화했다는 사실을 알 수 있었다.

이 보고에서는 종종 부정적인 관점에서 바라보기 쉬운 가치에를 구조 분석과 사상사적 고찰을 통해 검토함으로써 중세부터 근대까지 사람들의 의식 변천을 다루었다. 가치에라는 시각 자료의 분석방법을 포함하여 ‘일본의식’을 생각하는데 있어서도 뜻 깊은 보고였다.

【보고기사 집필자: 스즈무라 유스케

(호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원),

보고기사 감수: 다나카 유코(호세이대학교 사회학부 교수)】



報告者：出口 弘氏
(東京工業大学大学院総合理工学研究科教授)

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
アプローチ③「＜日本意識＞の現在―東アジアから」

第 7 回東アジア文化研究会

何香凝と日本留学 ― 革命への関わりと美術との出会い

- 報告者：竹内 理樺（同志社大学グローバル地域文化学部助教）
- 日 時：2013 年 11 月 22 日（金）18:30～20:30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

1878 年に香港の裕福な家庭に生まれた何香凝は、幼い頃に纏足を拒み、当時の女性には珍しく「天足（纏足をしたことのない自然のままの足）」の女性であったが、その「天足」が縁となり、アメリカ華僑で後に国民党左派の中核となった革命家の廖仲愷（1877-1925）と結婚し、1902 年末に夫婦で前後して日本に留学した。

当時、在日中国人留学生の中には国外にあって救国の志を強める者が少なくなかったが、何香凝も留学後間もない 1903 年 6 月、留学生同郷会の発行した雑誌『江蘇』に「敬んで我が同胞姉妹に告ぐ」という文章を発表し、中国人女子留学生に対し、数千年来の束縛を破り、みずから手で自由と幸福を獲得し、国家の再興のため立ち上がるよう呼びかけた。その後彼らは留学生集会で日本亡命中の孫文と出会い、その思想に共鳴して革命活動に参加するようになり、革命家・政治家としての第一歩を踏み出した。夫婦は当初、学校の寄宿舎に別々に住んでいたが、一軒家を借りて自宅を革命活動の拠点として提供し、1905 年 8 月に孫文が中国同盟会を結成すると、何香凝は最初的女性会員となった。当時は革命活動に参加する女性はまだまだ少なく、何香凝は二人の子を産み育てながら、孫文の要請で日本女性の使用人を雇わず、家事全般から同盟会の集会の接待、孫文宛の秘密文書の受け渡しなどの通信・連絡の任務を担い、孫文の強い信頼を得るようになった。そのため、1925 年の孫文の死にあたり、何香凝は遺囑の証人の一人となり、また、孫文自身から宋慶齡夫人の後事を託された。日本留学期からの孫文との強い結びつきは、彼女のその後の政治家としての道を方向づけることになった。孫文の死後間もなく夫の廖仲愷が暗殺されると、それまで女性運動の指導者として政治に参加していた何香凝は、夫の政治的地位を受け継ぐこととなった。その政治的役割は重要性を増し、夫と孫文の遺志を継承し、彼らの目指した国家と社会の実現のため尽力した。

何香凝は日本に留学後、東京女子師範学校を経て日本女子大学教育学部に入学したが、やがて体調不良と出産のため退学に至り、その後、女子美術学校で日本画を学んだ。美術学校への入学は、孫文が中国国内での武装蜂起時に必要な軍旗や告示のデザインをする人材を求めているという理由もあったが、何香凝は軍旗のデザインだけでなく縫製・刺繍もこなし、その後晩年に至るまで終生画家として画作を続けた。また、夫の死後、国民党内で独裁を強化する蒋介石と対立し、政治の第一線と距離を置くようになると、画家であることが彼女の立脚点となり、自作の絵画を売却することで生計を立て、絵画を通じた活動を行った。その画

風は日本で学んだ日本画を基盤とし、やがて伝統的な山水画や水墨画へと移行したが、特にフランス、ドイツに滞在した 1920 年代末からの二年間ほどの期間には、画作に没頭し、当時の絵画には西洋画の影響も感じられる。1931 年に満州事変が勃発すると、滞在していたフランスから急遽帰国して上海で書画展覧会を開き、書画の「義売（慈善販売会）」を通じた抗日救国活動に従事したが、「何香凝主催」と銘打った書画展覧会の反響は大きく、彼女の統率と影響力のもとで予想以上の成功をおさめ、社会的に大きな影響を与えた。その後、何香凝はたびたび書画展覧会を主催したが、この活動は慈善販売会、すなわち抗日救護活動を支えるための募金活動の役割を負っただけでなく、一般大衆に国家の危機を訴え、抗日と救国のため立ち上がるよう世論を喚起する役割も担っていた。

何香凝の絵画にはさまざまな題材が見られるが、特に 1910 年代に描いた「獅子」や「虎」と、1920 年代に描いた「梅」の題材が代表的なものとして評価される。「獅子」の絵は、彼女が 1913 年に描いた絵に、中国同盟会時代からの同志であった詩人の柳詒（1887-1958）が後に『国魂』という画題と「国の魂が眠れる獅子の目を醒めさせる」という題詩をつけたことから、彼女の描く獅子の絵すべてに「覚醒しようとする獅子」のイメージが与えられ、代表作として注目されるに至ったと考えられる。しかし、獅子や虎などの動物画は元来、日本留学中に師事した四条円山派の日本画家、田中頼璋（1868-1940）から学んだ画題であった。

何香凝自身が日本留学期について語った論述は多くはなく、孫文との関係や、当時の革命活動に関する記述がほとんどであったが、中華人民共和国建国後の



報告者：竹内 理樺氏
（同志社大学グローバル地域文化学部助教）

1961年に著した回想録『我的回憶』には、女子美術学校で教えを受けた端館紫川と、個人的に師事していた田中頼璋から熱心な指導を受けたことが記されている。また、日本女子大学在学中には、キリスト教（プロテスタント）の牧師であり日本の女子高等教育の第一人者であった校長の成瀬仁蔵（1858-1919）から、学習面で大きな支援を受けたことにも言及されている。何香凝にとって日本への留学は、孫文と出会い、革命家・政治家として歩み始めた出発点であり、また、彼女の画家としての基盤も日本留学中に築かれた。さらに、日本で教育の機会を得て西洋の自由・民主の思想や女性解放の思想に触れたことにより、彼女独自のジェンダー観や救国観が形成され、女性運動を指導する際の思想的基盤となったと考えられる。



会場の様子

【記事執筆：竹内 理樺

（同志社大学グローバル地域文化学部助教）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

7th East Asian Culture Research Meeting

He Xiangning and Study in Japan: Involvement in the Revolution and Encounter with Art

Speaker: Rika Takeuchi (Assistant Professor, Faculty of Global and Regional Studies, Doshisha University)

Date: Friday, 22 November 2013, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

He Xiangning accompanied her husband, Liao Zhongkai, to study in Japan, where she met Sun Yat-sen at a foreign student meeting. Finding herself in agreement

with his ideology, she began to participate in revolutionary activities. Husband and wife offered their home as focal point for revolutionary activity, and when Sun Yat-sen formed the Chinese Communist Party, He Xiangning became its first female member. Alongside housework and bringing up children, she took on the responsibilities of arranging Party meetings and the communications that involved. Through this she gained the deep trust of Sun Yat-sen. Upon his death she became an executor of his will, and was entrusted personally by him to see to the affairs of his wife, Soong Ching-ling. The strong ties she formed with Sun Yat-sen since their time of study in Japan directed her along the path to politician later in life, and she firmly believed it her own role to succeed the intentions of her husband and Sun Yat-sen. He Xiangning was also a renowned artist, and her time at a women's art college during her study period in Japan, learning Japanese painting, proved her starting point. Furthermore, the education she received in Japan shaped her views on gender and national salvation, and became the ideological base for her leading of the women's movement. The roots of He Xiangning as female politician, leader of the women's movement, and artist, all, then, lie in her period of study in Japan.

Report by: Rika Takeuchi (Assistant Professor, Faculty of Global and Regional Studies, Doshisha University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”

第7次东亚文化研究会

何香凝与日本留学—与革命的关系以及和美术的相遇

报告者: 竹内 理桦 (同志社大学全球地域文化学部助教)

日期: 2013年11月22日 (星期五) 18:30-20:30

会场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主持: 王 敏 (法政大学国际日本学研究所专任所员、教授)

与丈夫廖仲恺一起留学日本的何香凝在留学生的集会上与孙中山相识, 对其思想产生共鸣的她开始参加革命活

动。夫妇二人提供自己的居住地作为革命活动的据点, 当孙中山成立中国同盟会的时候, 何香凝成为了第一位女会员。她在处理家庭琐事的同时也担任着同盟会的集会招待、通信联络等任务, 并获得了孙中山的强烈信任。正因如此, 孙中山将其夫人宋庆龄的后事托付于她, 她也是孙中山遗嘱的见证人之一。留日期间与孙中山之间的关系促使她日后走上了政治家的道路, 并以继承其夫廖仲恺以及孙中山的遗志为使命。此外, 何香凝还是著名的画家, 日本留学期间在女子美术学校所受的日本画教育是其作为画家的出发点。最后, 在日本受到的教育使她形成了独特的性别观以及救国观, 并成为其指导女性运动的思想基础。可以说不论是作为女性政治家、女性运动的领导人还是作为画家, 何香凝的原点都在于她的留日期间。

【执笔者: 竹内 理桦 (同志社大学全球地域文化学部助教)】

문분과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년 ~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제7회 동아시아문화연구회

허상닝과 일본유학—혁명과의 관계와 미술과의 만남

보고자: 다케우치 리카(竹内理桦, 도시샤(同志社)대학교 글로벌지역문화학부 조교)

일시: 2013년 11월 22일(금) 18:30~20:30

장소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사회: 왕민(王敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

남편 라오중카이(廖仲恺)와 함께 일본에서 유학한 허상닝(何香凝)은 유학생 모임에서 손문(孫文)을 만나 그의 사상에 크게 감명을 받고 혁명활동에 참여하게 되었다. 부부는 자신들의 집을 혁명활동의 거점으로 제공했

고, 손문이 중국동맹회를 결성하자 허상닝은 최초의 여성회원이 되었다. 그녀는 가사와 육아를 하면서 동맹회 모임의 집대나 통신·연락 등의 임무를 담당해 손문의 두터운 신뢰를 얻었다. 이 때문에 손문이 죽음을 눈앞에 두었을 때 사후를 부탁한 사람 중 하나가 되었으며, 손문으로부터 직접 부인 송경령(宋慶齡)의 뒷일을 부탁받기도 했다. 이렇듯 일본유학 시절에 맺게 된 손문과의 두터운 유대관계는 그녀가 그 후 정치가로서의 길을 걷게 하는 계기가 되었으며, 그녀는 남편과 손문의 유지(遺志)를 계승하는 것이 자신의 역할이라고 자인했다.

허상닝은 저명한 화가이기도 한데 일본유학 때 여자미술학교에서 일본화 교육을 받은 것이 화가로서의 출발점이었다. 또한, 일본에서 받은 교육을 통해 독자적인 젠더관과 구국관이 형성되었으며 이는 여성운동을 지도하는 사상적 기반이 되었다. 여성정치인, 여성운동 지도자, 화가로서의 허상닝의 원점은 모두 일본유학 시절에 있었다고 할 수 있다.

【기사집필: 다케우치 리카

(도시샤대학교 글로벌지역문화학부 조교)】

第 8 回東アジア文化研究会 周恩来の中日関係観

- 報告者：曹 応旺（中共中央文献研究室研究員）
- 通訳者：林 櫛
- 日 時：2013 年 12 月 18 日（水）18:30～20:30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

一、周恩来の在日経験

周恩来は何回も訪れてきた日本の方々に自分が日本で勉強し生活した体験を話している。「私は 1917 年 9 月から 1919 年 4 月まで日本で一年半暮らした。日本を離れる時、神戸で船に乗ったが、桜の花が満開の京都に一ヶ月泊まっていた。船で洞窟を通して、琵琶湖に行った。琵琶湖はとても綺麗だった」と周恩来は振り返る。

周恩来は日本滞在の日記にこう書いている。「日本に来てから、すべての事について学ぶ目で見ろべきと思うようになった。日本人の一举手一投足、すべての行事などを私たち留学の人はきちんと留意すべきだと思った。私は毎日一時間余りを使って新聞を読んでいる。時間は大切だというのが、日本の国情などをちゃんと知るべきだ」。こうした観察と学習によって、「日本は非常に美しい文化がある」、日本人は勤勉で勇敢で叡智だと周恩来は認識するようになり、日本での学習と観察を通じて、「新しい思想」を切り開き、「新しい学問」を求め、「新しいこと」をやるべきだと周恩来は悟り、その後、マルクス主義を選択し、中国の近代化のため生涯奮闘するようになったことに大きな影響を与えている。

二、「我々は『同文同種』である」

これは日本の方から持ち出された話だが、周恩来はそれに賛同し「先ほど改進黨の先生が我々は『同文同種だ』と言われた。したがって、我々はこういった友誼を踏まえて中日関係を改善させることはまったく可能だ」と主張した。

文字については、中日両国とも漢字を使う。周恩来は日本語が下手だったが日本留学の時、毎日日本の新聞を一時間以上読んでいた。文化では、古代中国の多くの古典が日本に伝わって、日本民族の思想の重要な源となった。中日両国は相互理解がもっとも深く、「歴史上、両国は文化往来がとても頻繁だった」、「我々の文化は互いに交流し、影響しあった」と周恩来は言う。慣習では、中日両国の共通点も多い。

中日両国は人種と血縁も密接な繋がりがある。「戦争は人々を対立させたものだったが、互いの接触と理解も増やしている。ご存知のように、5000 名余の日本女性が中国人と結婚している。これは歴史上稀なことだ。両国はすでに親戚関係となっている」と周恩来は言う。

三、如何に中日間の歴史を見るべきか

「我々両国の歴史においては、二千年もの友好往来と文化交流を有して、両国人民は深い友情に結ばれている。我々はそれを大切にすべきだ」。1894 年以後の数十年間の中日関係は良くなかったが、「数千年と比べれば、60 年は大したものではない」と周恩来は言う。

1894 年以後の中日関係の歴史をいかに見るべきか？周恩来はこう考える。

第一に、「1894 年以後の半世紀にわたり、日本軍国主義者の中国侵略によって、中国人民が重大な災難を蒙ったが、日本人民も深く被害を受けた。前の事を忘れず、後の戒めと為す。こうした教訓を我々はしっかりと覚えるべきだ」。第二に、日本軍国主義者を広範な日本人民と厳格に区別すべきだ。第三に、すくなくない日本人は反戦同盟に参加し、中国の解放戦争に参加して、中国革命の勝利に貢献した。第四に、中国に対する日本の侵略は中国人民を目覚めさせる役割と反面教師の役割があった。第五に、近代以来の日本の工業化と日本の軍国主義を区別すべきだ。

四、如何に中日関係を処理すべきか

極東では日本と中国の関係が平和に対して決定的役割を果たす。中日両国が友好的なら双方にとって有利であり、非友好的なら、双方にとって不利だと周恩来は見る。

如何に中日友好関係を発展させるべきか？周恩来はいくつかの重要な原則を出している。一つは平和共存を堅持すること。「正常な往来に従ってやれば中日の文化交流は大きな発展力がある。鍵は平和共存だ。どちらも別の思惑を持つべきではない」。二つ目は求同存異を堅持すること。周恩来は松村謙三と会談した時、「紛争はありうることだが、総じて言えば、求同存異ができるはずだ」と指摘し、田中角栄を歓迎する宴会では、「大同を求めて、小異を残す」と主張。三つ目は礼尚往来（礼は往来をたつとぶ）、友好は先。松村謙三との会談では「私達の政策はこうだ。私達に友好的な国なら、私達はより一層友好的な態度で付き合い、私達を敵視するなら、私達も同様の態度で抵抗する」。「これらの原則を言葉二つで言えば、友好は先に、抵抗は後にすることだ」と周恩来は説明する。四つ目は前を見つめて大局を重んずること。「山本先生は謝罪の話をされた。これはもう過ぎ去ったことで、再び持ち出さなくていい。双方と

も前を見つめるべきで、中日両国人民は永遠に友好的であるべきだ」と周恩来は訪中した山本熊一に語る。その後、彼はまた日本の友人に、中日両国は小によって大を失うべきではなく、中日平和友好は大局であり、小局は大局に従うべきで、大局は小局に従うべきではないと言う。五つ目は軍国主義を警戒すること。「多くの日本人民は平和、独立、中立と民主主義の道を希望していると思う。ここ数年の国民運動の発展はこれを語っている。けれども、軍国主義を復活しようと、日本の昔の道に戻ろうとする一

部の人もいると私達も留意している」。六つ目は中日関係に対する米国の要素に的確に対処すること。日本は平和の役割を果たす限り、太平洋が太平になる。これは米国に有利であり、中国に有利であり、日本にも有利である。これこそ、周恩来が望んでいることだろう。

【記事執筆：

曹 応旺（中共中央文献研究室研究員）、林 櫪】



左より：王 敏 氏（司会者）、林 櫪 氏（通訳者）、
曹 応旺 氏（報告者）



会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

8th East Asian Culture Research Meeting Zhou Enlai and His View Towards Japan-China Relations

Speaker: Yingwang Cao (Researcher, CCCPC Party Literature Research Office)
Interpreter: Li Lin
Date: Wednesday, 18 December 2013, 18:30-20:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Since Zhou Enlai lived and studied in Japan from September 1917 till April 1919, Japan made a great im-

pression upon him. As Prime Minister, whenever he met with guests from Japan, he would approve of their views, saying “We are one and the same”. The two countries of China and Japan have enjoyed over 2000 years of movement and cultural exchange, and although relations during the couple of decades from 1894 had not been friendly, Zhou Enlai believed that this was of little importance compared with the few thousand years previous. Japan and China played decisive roles in securing peace in the Far East. Zhou Enlai said that friendly relations between the two countries brought advantages to both sides, whilst unfriendliness was disadvantageous to both. Zhou Enlai had in his sights peaceful co-existence, “seeking common ground while reserving differences”, “courtesy demanding reciprocity”, and amity, and laid down several forward-looking principles by which to develop friendly Chinese-Japanese relations: these included emphasising the broad view, guarding against militarism, and dealing decisively with American elements in Chinese-Japanese relations. As long as Japan carries out its peaceful role, the Pacific will be at peace. This is what Zhou Enlai would have wished.

Report by: Yingwang Cao (Researcher, CCCPC Party Literature Research Office)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”

第8次东亚文化研究会

周恩来的中日关系观

报告者: 曹 应旺(中共中央文献研究室研究员)
翻 译: 林 櫛
日 期: 2013年12月18日(星期三) 18:30-20:30
会 场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室
主 持: 王 敏(法政大学国际日本学研究所专任所员、教授)

周恩来从1917年9月到1919年4月曾经在日本学习和生

活过,对日本有着很深刻的印象。他在担任总理期间会见日本客人的时候,对“我们是同文同种”的观点表示了赞同。周恩来认为,中日两国有着两千年的往来与文化交流,虽然1894年以来的关系并不友好,但在数千年的交流史中并不是主流。中国和日本的关系对于远东的和平发挥着决定性作用,两国和则两利、斗则两败。在发展中日友好关系的问题上,周恩来提出了和平共存、求同存异、礼尚往来的原则,并指出在保持大局为重、积极友好的姿态的同时也要对军国主义保持警惕,还提出了要恰当处理中日关系中的美国要素的问题。只要日本发挥和平的作用,太平洋就会变得太平,而这也正是周恩来所期望的。

【执笔者:曹 应旺(中共中央文献研究室研究员)、林 櫛】

문부과학성 사립대학교 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)
국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래
연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제8회 동아시아문화연구회

저우언라이의 중일 관계관

보고자: 차오잉왕(曹应旺, 중공중앙(中共中央) 문헌연구실 연구원)
통역자: 린 리(林櫛)
일 시: 2013년 12월 18일(수) 18:30~20:30
장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
사회자: 왕민(王敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

저우언라이(周恩来)는 1917년 9월부터 1919년 4월까지 일본에서 공부하고 생활했었기 때문에 일본에 대한 인상이 매우 깊다. 총리가 된 후 만나게 된 한 일본 손님

의 “우리는 동문동종(同文同種)이다”라는 말에 견해를 같이 했다. 중일 양국은 이천 년에 걸쳐 서로 왕래하며 문화교류를 하고 있다. 그중 1894년부터 수십 년간은 우호적인 관계가 아니었는데 이에 대해 저우언라이는 수천 년에 비하면 별거 아니라고 보고 있다.

극동지역에서 일본과 중국의 관계는 평화에 결정적인 역할을 하고 있다. 저우언라이는 중일 양국이 우호적이라면 서로에게 유리할 것이고 비우호적이라면 모두에게 불리하다고 말한다. 중일 우호 관계를 발전시키기 위해 그는 평화공존, 구동존이(求同存異), 예를 갖추고 대하며 우호적 관계를 우선시하여 긍정적으로 대국(大局)을 존중하고 군국주의를 경계해 중일 관계에서 미국이라는 요소를 적확하게 대처한다는 등의 원칙을 내세우고 있다.

일본이 평화의 역할을 담당하는 한, 태평양은 평화로 워진다. 이것이 저우언라이가 바라는 바일 것이다.

【기사집필: 차오잉왕(중공중앙 문헌연구실 연구원), 린리】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
アプローチ③「＜日本意識＞の現在―東アジアから」

第 9 回東アジア文化研究会

法政速成科のメタヒストリー

―梅謙次郎・汪兆銘・周恩来―

- 報告者：古俣 達郎（法政大学史センター専門嘱託）
- 日 時：2014 年 1 月 22 日（水）18:30～20:30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

法政大学清国留学生法政速成科（以下、法政速成科）とは、明治後期に法政大学が清国からの留学生に短期速成の法学教育を施すために設立した学科である。法政速成科は、当時の法政大学総理梅謙次郎の指導の下、1904 年に開設され、第一班から第五班（1908 年 4 月卒業）まで計 1256 名の卒業生を送り出し、帰国後、卒業生の多くは、法律、政治、教育など様々な分野で活躍したことで知られている。2011 年には、辛亥革命 100 周年を迎えたこともあり、近年、法政速成科への関心は高まりつつあるが、本報告でこれまでの法政速成科の言説を辿ることによって、「法政速成科」像の変遷や法政速成科研究の進展状況を明らかにした。

1. 戦前の言説（「法政スピル運動」、日中戦争下の言説を中心に）

法政速成科はその廃止（1908 年）後、一時的に忘れられていたが、1920 年代末に法政大学内でおこった「法政スピル運動」において、梅謙次郎が「法政スピル」（法政精神）のシンボルとして顕彰される中、梅の業績を紹介する一エピソードとして、法政速成科に関する言説がみられるようになった。その後、日中戦争が勃発し、法政速成科の卒業生である汪兆銘が親日政権を樹立することで、法政速成科は大学内で非常に注目を浴びることになった。この時期の法政速成科に関する言説は、汪兆銘や彼に追随する人々のみを中心として論じており、法政速成科及び汪兆銘は時局に迎合する当時の大学当局によって宣伝材料として利用された（例えば、大川周明を迎えて設立された「大陸部」の設立趣意書などに法政速成科は言及されている）。

2. 戦後の言説（「法政大学中国研究会」、周恩来在学説等）

一方、戦後においては、経済学者の宇佐美誠次郎を中心として設立された「法政大学中国研究会」の調査によって、沈鈞儒など中華人民共和国の要人が法政速成科の卒業生として発見され、戦前の汪兆銘一色の「法政速成科像」を塗り替えていった。1950 年代後半には、法政大学の中心的な教員や学生が次々に訪中していたこともあり、法政速成科は日中文化交流の歴史的シンボルとして捉えられていった。また、1961 年には、法政大学初の本格的な通史として『法政大学八十年史』が刊行され、法政速成科は法政大学史上の位置づけを与えられることになった。し

かしながら、この時期の言説の問題点として、この当時、法政速成科もしくは法政大学の卒業生・在籍者とされた人々の中には、卒業及び在籍が確認されていない人物が多数含まれていたことは注意しなければならない。例えば、周恩来総理の法政大学在学説なども当時流布したが、今日までそれを裏付ける資料は見つかっていない。

3. 『法政大学資料集 第十一集』刊行以降の展開（「無名」の人々への注目）

1988 年には、法政速成科に関する一次資料を集成した『法政大学史資料集 第十一集』が刊行された。同資料集の刊行によって、学内外の研究者に、法政速成科は「研究」の対象と見なされるようになった。これらの研究は多様ではあるが、注目すべき点として、これまでの言説が主として汪兆銘や陳天華（例えば、『法政大学百年史』は陳天華を中心として法政速成科を描いている）といった著名な政治家・思想家を中心とした「法政速成科像」を描きがちであったのに対して、「無名」の人々や「地道」な活動によって中国の近代化に尽力した人々に焦点をあてていることが挙げられる。

こうして、梅の業績の一エピソードとして出発した法政速成科の言説は、戦時下の汪兆銘、戦後の陳天華らを中心とした「法政速成科像」を経て、ついにはその背後に存在していた数多の「無名」の人々による「地道」な活動をも視野に入れるに至ったのである。

4. 法政速成科研究への諸提案

最後に、以上の分析を踏まえた上で、報告者なりの法政速成科研究に関する提案として、以下の三点を挙げた。

- ① 特定の人物を法政速成科の「代表」として論じることの問題点（むしろ汪兆銘も陳天華も、そして沈鈞儒も共に学んでいた「空間」として考えるべきではないだろうか。彼らのその後の進路の差異があるのならば、それは如何にして生じたか。法政速成科はもちろん、彼らの日本経験等において何らかの差異があったのか、といった問いの必要性）
- ② 他大学との比較、共同調査の必要性（早稲田大学清国留学生部、明治大学経緯学堂等。法政速成科を語る際には、どうしても、ある種の「法政ナショナルリズム」を伴いがちであるが、そもそも当時の

中国人留学生たちは、中国同盟会など個々の在籍する学校を超えて活動していたのであって、この点を無視しては、彼らの実態は見えてこないであろう。彼らの日本経験において、在籍校という偏差がどのように作用していたか、もしくはいなかったのか)

- ③中国との「学術交流」の促進（1950年代には「文化交流」が唱えられたが、「学術交流」もなされな

ければならない。特に在籍者の確認などは中国からの情報がなにより重要であり、日中の研究者間で交流がなされることによって、法政速成科に関する理論的な深化や新たなパースペクティブが開かれることも期待される)

【記事執筆：古俣 達郎（法政大学史センター専門嘱託）】



左より：王 敏 氏（司会者）、古俣 達郎 氏（報告者）



会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
 “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
 Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

9th East Asian Culture Research Meeting

A Meta-history of the Short Course of Hosei University: Ume Kenjiro, Wang Zhaoming and Zhou Enlai

Speaker: Tatsuro Komata (Part-time Specialist, Center for the History of Hosei University)

Date: Wednesday, 22 January 2014, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The Hosei University Qing Chinese Student “Hosei Short Course” was a course established in the late Meiji Period designed for foreign students from Qing China to

receive a short-term education in law studies at Hosei University. This presentation traced discourse on the Hosei Short Course to date in order to shed light on changes in image of the Hosei Short Course, and also on the progress of research on the Hosei Short Course. To this end we investigated the pre-war “Hosei ‘Spirit’ Movement” and “Wang Jingwei ‘Boom’”, and, from the Post-war period, discourse on the Hosei Short Course found in texts relating to the history of Hosei University, such as “Hosei University China Research Meetings”, *Hosei University: an 80-year History*, and *Hosei University: a 100-year History*. To ascertain recent directions in its research, we looked at research conducted since *Hosei University Historical Material Collection* Volume 11(Special Edition: Hosei University Qing Chinese Student Hosei Short Course). In this research we discovered that the image of the Hosei Short Course had been re-defined: research hitherto centring on the famous names of Wang Jingwei and Chen Tianhua etc. made way for research on the “modest” activities of the many “nameless” individuals that had existed in the background.

Report by: Tatsuro Komata (Part-time Specialist, Center for the History of Hosei University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”

第9次东亚文化研究会

法政速成科的历史—梅谦次郎 汪兆铭 周恩来—

报告者：古俣 达郎（法政大学史中心兼职人员）

日 期：2014年1月22日（星期三）18:30-20:30

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主 持：王 敏（法政大学国际日本学研究所专任所员、教授）

法政大学清国留学生法政速成科，是法政大学在明

治后期为清朝留学生的短期速成式法学教育所设立的学科。本次报告，以探明法政速成科的形象变迁以及其研究进展为目的，对战前的“法政扩散运动”、“汪兆铭热”，以及战后的“法政大学中国研究会”、《法政大学八十年史》、《法政大学百年史》等资料中法政速成科的相关表述进行了探讨。此外，关于近年的研究动向，对《法政大学史资料集 第十一集》（法政大学清国留学生法政速成科特集）之后的各项研究进行了概括。这些研究对以往的以汪兆铭、陈天华等著名人物为中心的“法政速成科形象”进行了重新审视，并着手对其背后的“无名”之士所做的“踏实”的活动进行研究。

【执笔者：古俣 达郎（法政大学史中心兼职人员）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년 ~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-〈일본의식>의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제9회 동아시아문화연구회

‘호세이 속성과’의 메타히스토리—우메 겐지로·왕자오밍·저우언라이—

보고자: 고마타 다츠로(古俣達郎, 호세이대학교 역사센터 전문위원)

일 시: 2014년 1월 22일(수) 18:30~20:30

장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 왕민(王敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

‘호세이대학 청나라 유학생 호세이 속성과(速成科)’는 메이지 후기에 호세이대학이 청(淸)에서 온 유학생에게 단기 속성으로 법학 교육을 하기 위해 설립한 학과다.

이번 보고에서는 지금까지의 호세이 속성과에 대한 연설을 짚어가면서 ‘호세이 속성과’에 대한 이미지(像)의 변천과 연구 진행 상황을 명확히 하고자 했다. 전쟁 전에 관해서는 ‘호세이 스피릿(정신) 운동’ 및 ‘왕자오밍(汪兆銘) 붐’을, 전후에 관해서는 ‘호세이대학 중국연구회’와 『호세이대학 80년사』 『호세이대학 100년사』 등 호세이대학 역사와 관련된 여러 텍스트 속에서 호세이 속성과에 대한 연설을 검토했다.

또한 최근 연구동향으로서 『호세이대학 역사자료집 제11권』(호세이대학 청나라 유학생 호세이 속성과 특집) 이후의 여러 연구를 개관했다. 이러한 여러 연구에서는 왕자오밍과 첸티엔화(陳天華) 등 저명인사를 중심으로 지금까지의 ‘호세이 속성과’에 대한 이미지(像)를 재검토했으며, 그 배후에 존재했던 ‘무명’의 많은 사람들이 ‘성실’하게 활동한 모습까지도 염두에 둔 연구가 이루어지고 있다는 것을 밝혔다.

【기사집필: 고마타 다츠로

(호세이대학교 역사센터 전문위원)】

第 10 回東アジア文化研究会

日本古代・中世の教育と仏教

- 報告者：大戸 安弘（横浜国立大学教育人間科学部教授）
- 日 時：2014 年 2 月 26 日（水）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

今日の報告では、複雑多様な様相を呈する古代・中世の教育の特質について、仏教との関係を重視しながら理解しようとすることを課題とした。古代教育については、古代仏教の展開において屹立する役割を果たした空海（774-835）の生涯との関わりから検討し、その基本的様相を把握し、中世教育については、仏教信仰を受容した人々、とりわけ中世社会の変動に深く関わるることとなった武士と民衆との学びの諸相に注目した。

1. 空海の生涯と古代教育

空海は讃岐の地方豪族の家系であり、将来の地方官人として国ごとに設置された官人養成機関である国学で学んだ可能性がある。791 年に大学寮に入学。大学寮は唐の高等教育機関である国子学と太学をモデルに創設された中央の官人養成機関。学生に要求されたのは教科書の徹底的な暗記であり、注入式の授業が行われた。このような学校に馴染めなかったであろう、1 年ほどで退学し、仏道修行の道に入った。仏教をめぐる新しい動向のなかで、10 年程の間、仏教を中心としながらも儒教・道教との調和を意識しながら研鑽を重ねた。

804 年、遣唐使の留学僧として入唐。中国在留中に長安青龍寺の恵果より真言密教を継承する間、民衆教育施設存在に強い関心を示し、帰国後に同様な教育機関を創設することを決意し、806 年に帰国。民衆層にも開放された総合的な私立高等教育機関として綜藝種智院を創建。一般に、宗教家が世俗の教育に関わるようになるのは中世以降のことであったが、仏教の一切無差別の立場から、身分的制約を取り払い、民衆にも同時代の最高水準の学びの場を開いた空海は、「一切衆生本来平等」という大乘仏教の基本に徹した思想家であった。民衆にも開放された綜藝種智院であったが、その現実的な意味についても、久木幸男による 3.8～7.2% という 8・9 世紀頃の民衆識字率試算を示し、検討した。

2. 鎌倉仏教の展開と中世教育

中世社会において影響力を持った諸宗派は、平明にして革新的な教義を主として武士・民衆層を中心に説き、その対社会的影響力を強めていったが、その根底には強固な理論体系・思想体系を構築していた。したがって、信仰を確立していく過程では、理論的学習が不可欠であり、本質的な理解を深めていくために識字力は重要であった。

『実悟記拾遺』には、蓮如の側近であった下間安芸

蓮崇の無名時代の学習階梯を伝える記述が見られるが、それは道場における一向宗一般門徒の学習状況の一端を現している。蓮崇の出自については、越前国の農村の出身であること以外明らかにはならない。一般の無名の門徒だった当初はほとんど読み書きができなかった。しかし、40 歳で初めて「イロハ」字の学習を始め、次第に基礎的な識字力を身に付けていった。その後、懸命に經典学習に励み、やがて「才学ノ人（学識のある人）」と認められるようになり、教学の根幹を正確に理解した上で、信仰の確立へと向かっていった。

「五箇山衆連署申定」という 1552 年の一向宗門徒の文書では、85 名の門徒のうち 39 名、約 45% が花押を据えていることが注目される。花押を記すには、かなりの程度の識字力を持っていたものと考えられることから、門徒代表の約 45% が花押を据えているこの「申定」は、五箇山の門徒が保有していた識字力の状況を推測させる。

僧侶は概ね中世社会における知識人・文化人としてあったが、僧侶が活動している寺院は、武士や民衆の子どもの学びの場として大きな役割を果たしていた。中世社会には、各地域を代表するような大寺院から村落の小寺院まで、諸宗派の寺院が数多く建立されていた。これらの寺院が寺子（世俗の人々の子弟）を受け入れていたが、そこでは周到的識字教育が行われていた。このように寺院で学ぶことが許されたのは、有力な武士層や裕福な民衆層の子弟とは必ずしもいえない。それは村落のごく普通の小寺院においても学ぶ子どもの存在が確認されるからである。

仏教学研究の成果に裏打ちされた壮大にして精緻な理論体系に根差す宗教として仏教はあった。その本質を理解するためには經典学習は多様なレベルが必要であった。学僧から一般の世俗の人々に至るまでの多様なレベルで行われていた經典学習には、それぞれに対応した相当な程度の識字力が不可欠であったといえる。とりわけ中世以降の仏教の広まりは、經典学習の範囲が俗人にまで及び、また、その延長上に多くの人々の文字学習の場を広げ、結果として信徒の学びを多面的に導き出していったことになった。そのような意味で、武士や民衆という従前の被支配層にまで拡がる強固な教育的基盤を生み出していったといえる。

【記事執筆：大戸 安弘

（横浜国立大学教育人間科学部教授）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

10th East Asian Culture Research Meeting

Education and Buddhism in Japan in the Ancient Period and Middle Ages

Speaker: Yasuhiro Ohto (Professor, College of Education and Human Sciences, Yokohama National University)

Date: Wednesday, 26 February 2014, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Education in the Ancient Period and Middle Ages appears complex and diverse. Its special nature was our theme here, and we attempted to explain it with emphasis

on its links with Buddhism. We began with an investigation of Ancient-period education in connection with the life and work of Kukai (774-835) who played a vital role in the development of Ancient Buddhism. Having grasped the fundamental situation, we turned to education in the Middle Ages, and focussed on the various aspects of learning of the common people alongside samurai, who were the adopters of Buddhist faith and were particularly deeply involved in social change during the Middle Ages.

Buddhism was a religion originating in an elaborate theoretical system, the greatness of which is confirmed by the results of research in Buddhist theory. In order to understand its essence in those times, study of Buddhist scriptures was necessary to varying degrees, but essential was a high level of literacy. In particular the spread of Buddhism from the Middle Ages included commoners in its sphere, and in extension this meant an increase in opportunity for commoners to study reading and writing. As a result it led the way in many aspects of learning for believers. In that sense we can say that Buddhism created a strong educational base that reached both samurai and the masses – the once subordinate class.

Report by: Yasuhiro Ohto (Professor, College of Education and Human Sciences, Yokohama National University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”

第10次东亚文化研究会

日本古代・中世纪的教育与佛教

报告者：大戸 安弘（横浜国立大学教育人类科学部教授）

日 期：2014年2月26日（星期三）18:30~20:30

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主 持：王 敏（法政大学国际日本学研究所专任所员、教授）

日本古代・中世纪的教育呈现出复杂多样的特质，通过重视与佛教的关系来理解这一特质成为了课题之一。关

于古代教育，通过对在古代佛教的发展中发挥重要作用的空海（774-835）的讨论，把握了其基本的状况。关于中世纪教育，主要将目光集中在了接受佛教信仰的人们的学习状况之上，特别是与中世纪的社会变动息息相关的武士和民众。

佛教是佛教学研究成果的依据，也是一种有着庞大而且纤细的理论体系的宗教。为了理解其本质，各个层次的佛教经典的学习是必须的，而对于佛教经典学习而言，高水平的识字能力是不可或缺的。特别是中世纪以后的佛教的传播，其范围已经发展到了世俗之人，因而扩展了世俗之人学习文字的场所，其结果就是引导信徒的学习朝着多面性方向发展。从此意义上说也就是打造出了包括武士和民众等被支配阶层在内的广泛而又坚固的教育基础。

【执笔者：大戸 安弘（横浜国立大学教育人类科学部教授）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제10회 동아시아문화연구회

일본 고대·중세의 교육과 불교

보고자: 오토 야스히로(大戸安弘, 요코하마(横浜)국립대학교 교육인간과학부 교수)

일 시: 2014년 2월 26일(수) 18:30~20:30

장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 왕민(王敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

이번 연구에서는 복잡하고 다양한 양상을 보이는 일본 고대·중세 교육의 특성에 대해 불교와의 관계에 주안점을 두고 이해하고자 했다. 고대의 교육 내용에 대해서는 고대 불교 전개에 주요 역할을 한 구카이(空海, 774~835)의 생애와 불교와의 관련성을 검토하면서 기본적인 양상을 파악했다. 중세의 교육 내용은 불교 신앙을 수용한 사람들, 특히 중세의 사회 변화에 깊이 관여하게 된 무사와 민중의 학습 양상에 주목했다.

일본에서 불교는 불교학 연구의 성과가 뒷받침하는 웅대하고 정교한 이론체계에 뿌리내린 종교로서 존재했다. 그 본질을 이해하기 위해서는 다양한 레벨에서의 경

전(經典)학습이 필요했는데 여기에는 상당한 수준의 문자식별능력이 필수적이었다. 특히 중세 이후 불교는 속인(俗人)에게까지 확산됐고, 그 연장선상에서 속인의 문자 학습의 장이 확대되어 결과적으로 신도들의 학습을 다방면에서 이끌어 갔다. 이런 의미에서 이전의 피지배계층이었던 무사와 민중으로까지 확대되는 탄탄한 교육적 기반을 만들어 냈다고 할 수 있다.

【기사집필: 오토 야스히로

(요코하마국립대학교 교육인간과학부 교수)】



報告者：大戸 安弘氏（横浜国立大学教育人間科学部教授）

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
アプローチ④「＜日本意識＞の三角測量―未来へ」

第 2 回勉強会

西田に於ける包含の論理の図式的説明

- 報告者：ジャサント・トランブレ（北海道大学文学部客員研究員）
- 日 時：2013 年 12 月 16 日（月）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

今回は、北海道大学文学部客員研究員のジャサント・トランブレ氏を招き、「西田に於ける包含の論理の図式的説明」と題して行われた。

トランブレ氏は 1990 年にカナダのトロント大学で宗教哲学の博士号を取得した後、近現代の日本哲学、とりわけ西田幾多郎の哲学の研究に従事している。これまでに *Introduction à la philosophie de Nishida* (Paris, L'Harmattan, 2007)、*Auto-éveil et temporalité. Les Défis posés par la philosophie de Nishida* (Paris, L'Harmattan, 2007)、*L'Être-soi et l'être-ensemble. L'Auto-éveil comme méthode philosophique chez Nishida* (Paris, L'Harmattan, 2007) などの著作を上梓し、フランス語圏における数少ない西田哲学の専門家の一人として活動している。

報告の概要は以下の通りであった。

西田幾多郎の哲学は、独特で晦渋な文体と言葉の用い方の独自さにより、しばしば難解であるとされる。実際、小林秀雄や小林敏明は西田の文体が明快さを欠くとして批判している。一方、下村寅太郎が「西田の言葉は日本人の魂を語る」と評することを考慮するのなら、確かに西田の文体は他の思想家との類似性を見出しにくく特殊ではあるものの、概念的な体系を築き上げるだけでなく日本語を通して自らの哲学を語ったといえよう。そこで、今回は西田哲学を理解するための方法として西田の文体から出発して西田の哲学的な体系の説明をしようと思う。

西田の哲学と思索を考える際の出発点となるのが、「に於てある」という表現である。「に於てある」とはあるものは「何かに「於てある」」ということの意味しており、「ある」ものは内容を示している。そして、「に於てある」は「於てある場所」と「於てあるもの」の考えである。それでは、「於てある場所」とは何であろうか。西田は「物の存在を認めるため、於てある場所という如きものが考えられねばならぬ」と述べており、「一般なるもの」が「於てある場所」となることはなく、「於てある場所」は常に「於てあるもの」との間の関係の中で成り立つのである。この関係は、例えば、「教室は大学という場所に包含される内容であるが、大学は所在する土地という場所に包含される内容となる」というあり方からも理解される。そして場所と内容の包含関係を示すために西田がどのような動詞や助詞を用いたかに注目するとき、言葉の用法の特徴が分かる。すなわち、場所の立場から見た包含を示す動詞としては、「包む」（「知るということとは先づ内に包むということではなければならない」）、「含む」（「意識は……対象を内に包む」）、「有つ」（「真

に自由なる自己は自己自身の内容を有たねばならない」）といった単語が使われ、「の中に」（「現在は深く深く我の中に入っていく」）、「に於て」（「有るものは何かに於てある」）といった助詞が用いられている。

ところで、西田の文章の中には、場所に関する表現は多いものの、内容を示す概念は、「所与」、「個物」、「ノエマ」、「対象」、「特殊」、「於てあるもの」、「有るもの」などで、数としては決して多くない。しかし、これは、西田が内容を重視していない、あるいは内容が西田の哲学の対象とならないためではなく、むしろ内容は常に内容なのではなく、「教室はわれわれにとっては場所だが学校にとっては内容になる」という事例が示すように、絶えず場所との関係が変わるためである。そして、内容と場所との関係について、西田は「結合」、「即」、「矛盾的自己同一」、「創造」、「弁証法」、「形成」、「対立」、「非連続」、「限定」、「表現」、「否定」、「関係」、「統一」といった言葉を用いて説明を行ったのである。このような言葉の使い方からも分かるように、西田にとって場所と内容の関係は静的ではなく、動的である。この動的な関係は、ヨハン・セバスチャン・バッハのオルガン曲である「前奏曲とフーガ」BWV548 の冒頭の、E の音から始まって半音階的な下降と上昇的旋律とが交互に現れる箇所を通して理解することが出来るだろう。すなわち、個物、あるいは真の実在から出発して内容というより具体的な内容への超越と場所というより抽象的な方向への超越という二つの動きを示すのである。

このように、文体から出発して体系へと至ることは、西田の哲学の枠組みと構造を知るための重要な手段といえるだろう。周知の通り「場所」はプラトン、アリストテレス以来の西洋哲学における重要な概念であり、その意味で、西田は西洋哲学の伝統的な問題に取り組んだのである。その際、西田は主語の明示といった西洋の言語の影響によって変質した近代の日本語によって思索し、自らの哲学的言語を創造しようとしたのであった。これは、日本語によって西洋の哲学を紹介するというだけではなく、日本語によって自らの哲学の体系を確立しようと試みたことを意味する。そして、思想が言語に先立つことも、言語にともなつて思想が生ずることもなく、むしろ言語と思想は互いに影響を与えながら同時的に発展するのであり、それゆえに、西田の言葉を分析することによって、西田の哲学をよりよく理解することが可能になるのである。

日本語を母語とする者にとっては単に難解であるかもしれない西田の哲学的な論考を文法的な特徴に

勉強会報告

即して検討するという手法は、日本語を母語としない外国人であるがゆえに可能な着想かも知れない。思想と言葉、そしてそれによって生み出される対象と主体との関わりを考える上で、トランブレー氏の報

告は示唆に富む内容であると考えられた。

【記事執筆：鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】



左から：安孫子 信氏（司会者）、
ジャサント・トランブレー氏（報告者）



会場の様子

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”.

2nd Study Meeting

Schematic Explanation of the Logic of Comprehension in Nishida

Date: Monday, 16 December 2013, 18:30-20:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building
2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
Speaker: Jacynthe Tremblay (Visiting Researcher, Faculty of Letters, Hokkaido University)
Chair: Shin Abiko (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

This 2nd study meeting of 2013 welcomed Dr. Jacynthe Tremblay (Visiting Researcher, Faculty of Letters, Hokkaido University), and had as its theme, “Schematic Explanation of the Logic of Comprehension in Nishida”. Since gaining a Doctorate in religious philosophy at Toronto University in 1990, Dr. Tremblay has been engaged

in research into modern Japanese philosophy, and is active as one of the very few specialists of Nishida Philosophy in the French-speaking world.

The philosophy of Nishida Kitaro is often seen as obscure due to the singularity of its expressions and the uniqueness of its concepts. On this occasion, Dr. Tremblay gave a report that aimed to explain Nishida's philosophical system of investigating literary characteristics. Results indicated that Nishida investigated the concept of “basho” (topos) – the most famous theme of Nishida philosophy - within the Japanese language, in an attempt to establish his own philosophical system. There is no question that Nishida's philosophical theses are difficult to understand even for those with Japanese as their native language. A method of examining these obscure arguments along the lines of their grammatical features, however, is an original idea that could perhaps only be made possible by a foreigner without Japanese as mother tongue. In this way, Dr. Tremblay's presentation was full of suggestions for considering the relationship of ideology and words, and also the relationship of object and subject that emerges from it.

Report by: Yusuke Suzumura (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法④“对日意识”的三角测量——面向未来

2013 年度第 2 次学习会

西田的包含理论的图解式说明

报告者: 杰森斯·崔姆布莱(北海道大学文学部客座研究员)

日期: 2013年12月16日(星期一) 18:30-20:30
会场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室
主持: 安孙子 信(法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授)

在2013年第二次学习会上, 杰森斯·崔姆布莱(Jacynthe Tremblay)女士(北海道大学文学部客座研究员)为我们作了题为“西田的包含理论的图解式说明”的报告。崔姆布莱女士在1990年从多伦多大学取得宗教哲学的

博士学位后, 一直从事日本近现代哲学研究, 是法语圈为数不多的研究西田哲学的专家之一。

西田几多郎的哲学由于其表现及概念的独特性, 常常被认为是十分难懂的。此次报告会上, 崔姆布莱女士通过讨论其文体的特征, 对西田的哲学体系进行了说明。“场所”(topos)的概念是西方哲学的传统主题, 西田使用日语对这一概念进行探讨, 并尝试确立自己的哲学体系。对于以日语为母语的人来说, 西田的哲学性论述也许很难理解, 但对于日语非母语的外国人来说, 则可以通过抓住其语法性特点来探讨这一难题。从此意义上说, 在思考思想与语言, 以及由此派生出来的对象与主体的关系的时候, 该报告也是十分具有启发意义的。

【执笔者: 铃村 裕辅

(法政大学国际日本学研究所客座学术研究员)】

문부과학성 사업대학교 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구④ <일본의식>의 삼각측량-미래를 향해

제2회 연구회

니시다의 포함 논리에 관한 도식적 설명

일시: 2013년 12월 16일(월) 18:30~20:30
장소: 호세이대학교 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
강사: 자상트 트랑블레(홋카이도(北海道)대학교 문학부 객원연구원)
사회: 아비코 신(安孫子信, 호세이대학교 국제일본학연구소 소장, 문학부 교수)

2013년도 제2회 연구회는 자상트 트랑블레(Jacynthe Tremblay)씨를 맞아 ‘니시다의 포함 논리에 관한 도식적 설명’이라는 제목으로 진행됐다. 트랑블레씨는 1990년 토론토대학교에서 종교철학 박사학위를 취득한 후 일본의 근현대 철학에 대해 연구하고 있으며, 프

랑스어권에서는 몇 안 되는 니시다 철학의 전문가 중 한 사람으로 활동하고 있다.

니시다 기타로(西田幾多郎)의 철학은 표현의 특이성과 개념의 독창성때문에 종종 난해하다는 평을 듣는다. 따라서 트랑블레 씨는 이번 보고에서 문체의 특징을 검토함으로써 니시다의 철학적 체계를 설명하는 것을 목표로 했다. 그 결과, 니시다는 서양철학의 전통적인 주제이기도 한 ‘장소’(topos)의 개념을 일본어로 검토해 자신의 철학적 체계를 확립하려고 했다는 점이 밝혀졌다. 물론, 일본어를 모국어로 하는 사람에게도 니시다의 철학적 논고는 난해할지 모른다. 그러나 그러한 난해한 논의를 문법적인 특징에 맞게 검토하는 방법은 일본어를 모국어로 하지 않는 외국인이기 때문에 가능한 착상이라 할 수 있다. 그런 의미에서 사상과 언어, 그리고 그로 인해 파생된 대상과 주체와의 관계를 생각하는데 있어서도 트랑블레 씨의 보고는 시사하는 바가 큰 내용이었다.

【기사집필: 스즈무라 유스케

(호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
アプローチ④「＜日本意識＞の三角測量―未来へ」

第 3 回勉強会

近現代芸術における芸術と科学との相互作用について

- 報告者：ガブリエル・デカマス（九州大学国際教育センター講師）
- 通訳者：鈴木 裕輔（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）
- 日 時：2014 年 2 月 28 日（金）15：00～17：00
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

今回はガブリエル・デカマス氏（九州大学）を迎え、「近現代芸術における芸術と科学との相互作用について」と題して行われた。

デカマス氏はロンドン大学において視覚文化学の博士号を取得し、視覚文化学、人文科学、核技術、近代学、ポストコロナ理論を専門としている。また、これまでに芸術家オルランのアシスタントを務めたほか、ニューヨーク近代美術館やグッゲンハイム美術館で学芸員として美術館実務に従事した経験を持つ気鋭の研究者である。

報告の概要は以下の通りであった。

一般に、芸術と科学とは互いに乖離していると考えられている。芸術と科学の乖離の問題に最初に焦点を当てた人物の一人がチャールズ・パーシー・スノーで、1959 年にケンブリッジ大学で行った「二つの文化」と題された講演は、今日でも議論の対象となっている。スノーは講演の中で科学者が文学に造詣のある人々を軽視する態度や、科学者と人文学者の間の行動や話し方、振る舞い方の相違を指摘した。

一方、フランク・レイモンド・リーヴィスはスノーの議論に反論し、英国において「リーヴィス・スノー論争」と呼ばれる議論を巻き起こした。この論争の背景には冷戦構造があり、1957 年にソ連がスプートニクの発射に成功したことで、スノーは英国の教育制度が学者に対して十分な機会を提供することに失敗したとみなしたのであった。

また、ユルゲン・ハーバーマスによれば、芸術と科学の分裂の起源は 18 世紀に起きた形而上学と宗教の没落に求められ、芸術、科学、正義という三つの相に分裂するとともに、専門家たちの支配下に置かれることになったのである。

ところで、2011 年に起きた東日本大震災は人々に芸術と科学の関係を考えさせる機会をもたらした。例えば、「詩の磔」を書いた和合亮一は、詩を通して芸術と科学の関係を思索した人物であった。また、インド系イギリス人の彫刻家アニシュ・カプールと日本の建築家の磯崎新は、客席に被災地から入手された木材を利用する移動式の演奏会場を制作した。しかしながら、日本には楽観主義が根強いようで、「プロジェクト FUKUSHIMA!」という音楽祭を催した大友良英は、肯定的な力としての芸術と否定的な力を持つ科学との調停を試みたのであった。

芸術と科学の本質について検討した思想家の一人がマルティン・ハイデガーであった。ハイデガーは芸術の本質を *Gestell*（徴発、集立）として否定的に捉

え、芸術の本質を、技術の否定的なあり方を「救う力」と考え、技術と芸術との対立を描いた。それとともに、ハイデガーは芸術と技術とが完全に乖離しているのではなく、むしろ芸術が技術の不足する点、あるいは否定的な側面を補うと考えたのであった。

また、1986 年に起きたチェルノブイリ原子力発電所の事故に遭遇した人々の真実の姿を描こうとしたスヴェトラナ・アレクシエーヴィチは、住民の声を記録することによって、放射線という目に見えない対象を可視化することに成功した。その意味で、アレクシエーヴィチは、ジャン＝フランソワ・リオタールが「表現し得ないものを視覚的な方法で明瞭に示すもの」と定義した芸術の役割を実証したといえる。

しかし、技術は経済的な理由からよりよい印象を人々に与えることが必要となっており、危険と思われる原子力業界で好感度を向上させるために様々な方策が採られていることは、技術と芸術の関係を考える上でも重要な意味を持っている。そして、リオタールは芸術が「救う力」を本質とせず、美術品への投機という現象が示すように、芸術の持つ崇高の運動は資本主義の影響によって資本の動きと重なり、芸術も技術と同じ「資本主義の論理」に従っていると指摘する。

これに対し、「個体によって現象が生じる」という考えとは異なる、「現象によって個体が存在する」、あるいは「同一の対象であっても媒介物によって見方が異なる」というあり方こそが、カレン・バラードが提唱した「内的な相互作用」(intra-actions) の概念なのである。すなわち、バラードは現象と現象を観察するための装置が存在論的に不可分であることを指摘しているのであり、このようなバラードの考えによって、われわれは芸術、科学、西洋、東洋といったものがそれぞれに独立して交渉を持たないのではなく、「内的な相互作用」によって互いに影響を受けていることを知るのである。

それでは、「内的な相互作用」としてはどのような事例が挙げられるだろうか。アフリカの彫刻がキュビズムと近代芸術に大きな影響を与えたことなどは、芸術における「内的な相互作用」の一例である。そして、文化を超えて相互に影響を及ぼしあうというあり方を考えるなら、日本とフランスの間にも「内的な相互作用」が存在することが分かる。すなわち、日本の浮世絵がフィンセント・ファン・ゴッホに与えた影響や、クロード・モネの日本への傾倒などは、日本とフランスとの間の「内的な相互作用」の顕著な事例といえよう。一方、原田直次郎の『騎龍観音』

(1890 年) や本田錦吉郎の『羽衣天女』(1890 年) などが西洋の宗教画に触発されて日本的な題材を描いていることは、西洋の芸術が日本の芸術に影響を与えた例である。

あるいは、芸術と科学の間の「内的な相互作用」については、エミール・ゾラが *Le Roman expérimental* (『実験小説』) の中で靈感の源として科学に言及していること、ヴィクトール・ユーゴーが *L'art et la Science* (『科学と芸術』) の中で、芸術と科学の共生関係を理論化したことが挙げられる。そして、東洋と西洋における科学の発展の違いのため、日本ではゾラやユーゴーに類する事例は乏しいものの、芸術と技術との内的な相互作用は存在したのである。

確かに、芸術と科学の乖離を唱えたスノーの指摘は適切である。しかし、われわれは芸術と科学、あるいは現在と過去における西洋と東洋との間に「内的な相互作用」が存在することを認めなければならない。

実際、ヨーロッパと日本の場合に限っても、われわれは相手の文化によって侵略されるとともに侵略し、影響するとともに影響されてきたのである。そして最も重要なことは、われわれの誰もが、技術による災害を直視しなければならなかったということであり、その意味で、われわれは、21 世紀にはそぐわない国家と国民のアイデンティティという問題を生み出す「よそ者」なのではなく、むしろ兄弟姉妹なのである。

芸術と科学、あるいは西洋と東洋の関係を乖離ではなく相補的、さらには「内的な相互作用」という観点から捉えなおすデカマス氏の論考は、二元的に理解されやすい事柄に備わる本質的なあり方を考えるための重要な手がかりを示したといえるだろう。

【記事執筆：鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】



左から：安孫子 信氏（司会者）、鈴木 裕輔氏（通訳者）、
ガブリエル・デカマス氏（報告者）



会場の様子

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”.

3rd Study Meeting

About Art and Science’s “Intra-Actions” in Modern and Contemporary Art

Lecturer: Gabrielle Decamous (Lecturer, International Education Center, Kyushu University)

Interpreter: Yusuke Suzumura (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Date: Friday, 28 February 2014, 15:00-17:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: Shin Abiko (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

This occasion welcomed Dr. Gabrielle Decamous, who spoke on the subject, “About Art and Science’s ‘Intra-

Actions’ in Modern and Contemporary Art”. The presentation had as its starting point “the gap between art and technology” a notion raised in a lecture given by the British physicist and author, Charles Percy Snow in 1959. Next it introduced the work carried out by artists during the Fukushima Daiichi Nuclear Power Station disaster following the Great East Japan Earthquake of 2011, indicating the relationship of technology and art today. We also acknowledged the observations relating to art and technology made by thinkers such as Martin Heidegger and Jean-Francois Lyotard. We then followed the notion of “Intra- actions” advocated by Karen Barad, and investigated how supposedly opposing sides - West and East, Japan and Europe, or art and science - influence each other. Dr. Decamous’ thesis redefines the relationship of art and science, or indeed West and East, as being complementary, and as having, furthermore, “internal intra-actions” rather than a gap between them. This provided an important model for considering the essence of apparently two-dimensional and easily understood concepts.

Report by: Yusuke Suzumura (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法④ “对日意识”
の三角測量——面向未来

2013 年度第 3 次学习会

关于近代艺术中艺术与科学的相互作用

报告者：加百利·笛卡玛斯(九州大学国际教育中心讲师)

翻译：铃村 裕辅(法政大学国际日本学研究所客座学术研究员)

日期：2014年2月28日(星期五) 15:00-17:00

会场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主持：安孙子 信(法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授)

此次研究会邀请到了加百利·笛卡玛斯(九州大学)为我们作了题为“关于近代艺术中艺术与科学的相互作用”的报告。报告以英国物理学家和小说家的查尔斯·佩西·斯

诺(Charles Percy Snow)在1959年的演讲中所指出的“艺术与技术的背离”为切入点，介绍了福岛核电站事故发生之际，艺术家们所做的努力，并揭示了现如今的技术与艺术之间的关系。然后还谈到了马丁·海德格尔(Martin Heidegger)对利奥塔(Jean-Francois Lyotard)等一些思想家关于艺术与技术的意见。此外，根据凯伦·巴拉德(Karen Barad)所提出的“内部相互作用”(Intra-actions)的概念，对西洋与东洋、日本与欧洲或者是艺术与科学之类的对立事项是如何相互影响的进行了讨论。最后得出，艺术与科学或者是西洋与东洋的关系不是相互背离而是相辅相成的。对于容易被二元性理解的事物，从“内部相互作用”的观点得出的马丁的论证，是思考其根本性应有姿态时的重要线索。

【执笔者：铃村 裕辅

(法政大学国际日本学研究所客座学术研究员)】

문분과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년 ~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구④ <일본의식>의 삼각측량-미래를 향해

제3회 연구회

근현대 예술에서 예술과 과학의 상호 작용에 대해

일 시: 2014년 2월 28일(금) 15:00~17:00

장 소: 호세이대학교 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

강 사: 가브리엘 데카마스(규슈(九州)대학교 국제교 육센터 강사)

통 역: 스즈무라 유스케(鈴村裕輔, 호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원)

사 회: 아비코 신(安孫子信, 호세이대학교 국제일본학 연구소 연구소장, 문학부 교수)

이번 연구회는 가브리엘 데카마스 씨를 맞아 ‘근현대 예술에서 예술과 과학의 상호작용에 대해’라는 제목으로 열렸다. 보고는 영국의 물리학자이자 소설가인 찰스

스노(Charles Percy Snow)가 1959년에 실시한 강연에서 지적했던 ‘예술과 기술의 괴리’를 언급하며 이야기를 풀어나갔다. 이어, 기술의 실패라 할 수 있는 2011년 동일본대지진으로 발생한 후쿠시마 제1원자력발전소 사고 이후 예술가들의 활동을 소개하며 오늘날의 기술과 예술의 관계를 제시했다.

또한 마르틴 하이데거(Martin Heidegger)와 리오타르(Jean-Francois Lyotard) 등 사상가들의 예술과 기술에 대한 지적을 확인했다. 그리고 카렌 발라드(Karen Barad)가 제창한 ‘내적상호작용’(Intra-actions)이라는 개념에 따라, 서양과 동양, 일본과 유럽 또는 예술과 과학이라는 대립적으로 파악되는 사항이 어떻게 서로 영향을 미치는가에 대해 검토했다. 예술과 과학 혹은 서양과 동양의 관계를 괴리가 아닌 보완적, 나아가 ‘내적상호작용’이라는 관점에서 새롭게 인식한 데카마스 씨의 논고는 이원적으로 이해되기 쉬운 사항이 지니고 있는 본질적인 상태를 생각하는 데 중요한 단서를 제시했다고 할 수 있다.

【기사집필: 스즈무라 유스케

(호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
アプローチ④「＜日本意識＞の三角測量―未来へ」

第 4 回勉強会

トルコにおける日本学

- 報告者：エルダル・キュチュキュアルチュン（ボアジチ大学・アジア学研究所助教）
オウス・バイカラ（ボアジチ大学文理学部翻訳通訳学科准教授）
- 日 時：2014 年 3 月 22 日（土）16：30～19：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：小口 雅史（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）

1. 「トルコにおける日本学の歴史と現状」

報告者 エルダル・キュチュキュアルチュン

広い意味でトルコ人が日本を意識した最古の書物は 11 世紀のマハムード・カシュガーリの『突厥語辞典』である。さらに 17 世紀のオスマントルコの博学者チャーティプ・チェレビーの『ジハンヌマー』（世界の鏡）の中にも「ヤポンヤ」が出てくる。この本は印刷技術をオスマン帝国に紹介したとされるイブラヒム・ムテフェリカの手によって 1732 年に初出版され、中に載っていた『ジェゼイレイ・ヤポンヤ』（日本列島）もイスラム世界における初の日本地図になる。

両国の関係の始まりはオスマン・トルコ帝国の末期である 19 世紀末であった。そしてトルコにおける日本の積極的なイメージの成立にインパクトを与えた事件が二つほどあったと言える。それらは次のことである。

1. 和歌山県串本町で起きたエルトゥールル号災害事件（1890 年）
2. 日露戦争（1904-05 年）

日本を話題とした最初の本である『日本の過去・現在と将来』（フランス語から翻訳）がエルトゥールル号事件直後の 1891 年に出版されたのはけして偶然ではなく、災害事件に関するニュースの影響が大きかった。その後を追うように次々と新しい本が出るようになる。名作家ピエール・ロティの『日本旅行記』をはじめ、フランス語からの翻訳が多かったこの時期は、日本が持つロマンチックなイメージの元でもある。

1904 年に勃発した日露戦争では、当時共通の敵だと思われたロシアに対して日本が勝つという誰も予測できなかった展開に、トルコ国民も感動し、日本を大国として見るようになった。オスマン帝国が派遣した二人の幹部がこの戦争のいきさつを報告し、日本軍をはじめに日本に関して身近な情報を与えることになった。後に出版されたこの報告書は軍事的な関心の元である。

軍事大国日本のイメージは共和国時代の初期から 20 世紀末にかけて段々と経済発展の「ロールモデル日本」のイメージに変化する。したがって、『日本人の本当の力～日本はなぜそしてどのようにして発展したか』（1942）、『経済発展の道への例としての日本とトルコ』（1971）、『日本の奇跡と我々』（1982）、『これぞ日本のモデル』（1985）、『経済成長・経済発展・社会的発展・企画論と日本の発展』（1988）、『総合商社～海外発展のモデルとしての日本』（1993）などの

ようなタイトルが増える。

このテーマとほぼ平行した形でアブドゥルレシッド・イブラヒムの『イスラム世界と日本におけるイスラム教』（1911）が保守的な議論者の間で人気の自立したジャンルになっていく。日本がイスラムの国になりえる夢をベースにしたこのジャンルはほとんど変化せずしつこく現在まで残っているのである。

ようやく 2000 年代から数多くの大学で日本語学科が開かれ、日本語のできる研究者が育ち、学術的研究の強い基盤が成立するようになった。

【記事執筆：エルダル・キュチュキュアルチュン
（ボアジチ大学・アジア学研究所助教）】



報告者：エルダル・キュチュキュアルチュン氏
（ボアジチ大学・アジア学研究所助教）

2. 「トルコにおける日本文学の将来性 —日本文学と日本語教育を中心に—」

報告者 オウズ・バイカラ

本報告では、1959年に出版された『日本文学短編集』を始めに、日本文学からトルコ語に翻訳された作品をイスラエルの翻訳学者のイタマル・エヴェン＝ゾハールの多元システム論（polysystem theory）によって検討した。目的は1959-2005年の間にトルコで出版された日本文学の動態の探求であった。日本文学からトルコ語に翻訳の要因を調査および分析し、そして次の結論に達した。

1. 研究の過程でこの期間内に翻訳された45作品の作家、作品、翻訳者と出版社名を研究したが、やはり翻訳数が少なかったことが明らかとなった。それは、日本からの翻訳文学は常にトルコ文学の多元システムによって歴史的に周辺的であったことを証明した。さらにどの時点で見ても、この翻訳文学が決してトルコに新しい「ファッショナブルなレパートリー」をもたらした主要なチャンネルではなかった（エヴェン＝ゾハール）。その結果、日本文学の翻訳はトルコ文学の多元システムの中でいつも周辺的であった。これらの要因の横に、この二つの言語の間に適切な翻訳者の不足やその他の商業、文化、言語的および他の政治的な理由が、この現象を生んだのである。
2. この研究はまた、国際翻訳システムで、言語の中心性と、その言語から作られた翻訳の割合との間に直接的な関係があることを示唆した。日本語とトルコ語などのような周辺の言語から翻訳する場合は英語、フランス語、ドイツ語などのようなもっと中心的な言語を経由する必要があることが分かった。
3. 出版社とのインタビューはトルコにおける日本文学からの作品選択が西洋の好みや、関心に沿って行われたことを示した。ノーベル賞は毎年、一人の作者を正典化するが、その作品は英語で出

版されなければならない。これは英語が翻訳活動において普遍的な優位な立場にあることを示している。同様に、ほぼ2005年までトルコ語に訳された日本の文学作品のすべては英語からの翻訳である。私がインタビューした出版社の一つは、指摘したように翻訳の決定が、「国際ブックフェア」で、商業の雰囲気に応じて作られていることを示した。そして日本文学はこの規則の例外ではない。そして出版社は、常に英語が承認した作品の翻訳をすることが好ましい。

4. 最近日本語学の興味や研究者が増えてきて2005年から2013年の間に日本文学作品の直訳が盛んになったが直訳できる翻訳者は一握りの専門家であり、まだまだ三人か四人に過ぎない状態である。

【記事執筆：オウズ・バイカラ

（ボアジチ大学文理学部翻訳通訳学科准教授）】



報告者：オウズ・バイカラ氏
（ボアジチ大学文理学部翻訳通訳学科准教授）



会場の様子

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”.

4th Study Meeting

Japanese Studies in Turkey

Lecturers: Erdal Küçükyağcı (Research Associate, Asian Studies Center, Boğaziçi University)

Oğuz Baykara (Associate Professor, Department of Translation Studies, Boğaziçi University)

Date: Saturday, 22 March 2014, 16:30-19:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: Masashi Oguchi (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

We considered the growth of Japanese studies in Turkey divided into three periods: “Ottoman Turkey”, “From the early Republic until the end of the 20th century”, and “During the 2000s”. Today, many universities have a Japanese department, and are nurturing researchers with

a high level of expertise about Japan. Also, since the first ever “Japanese Studies Conference” held in 2010, over 40 scholars gathered in 2013 and submitted theses in various fields from linguistics to history and economics. We can say, then, that Japanese studies in Turkey hold great potential to grow from historical foundations.

Report by: Erdal Küçükyağcı (Research Associate, Asian Studies Center, Boğaziçi University)

In the Post-war Period, economic relations prospered between Turkey and Japan, yet there was extremely little literary exchange. Beginning with *Collection of Short Stories of Japanese Literature* published in 1959, around 60 volumes of works of Japanese literature were translated into Turkish. Most of the texts used in translation until the 21st century were already in the European languages of French, German and, predominantly, English. This lecture traces the 50 years of progress in translating Japanese literature into Turkish, giving examples of authors, works, translators, publishers and titles.

Report by: Oğuz Baykara (Associate Professor, Department of Translation Studies, Boğaziçi University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法④ “对日意识”
의三角测量——面向未来

2013 年度第 4 次学习会

土耳其的日本学

报告者: 埃利达尔·库苏雅辛(土耳其海峡大学·亚洲学
研究所助教)

奥兹·拜卡拉(土耳其海峡大学笔译·口译学科
副教授)

日 期: 2014年3月22日(星期六) 16:30-19:30

会 场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研
究所讲习室

主 持: 小口雅史(法政大学国际日本学研究所所员、
文学部教授)

土耳其的日本学发展经历了“奥斯曼土耳其”、“共
和国初期到20世纪末”以及“2000年以后”三个时期。现
在,很多的大学都开设了日语课程,开始培养高水平研究
人员。与此同时,2010年成立的“日本学学会”到2013年

为止,已经吸引了40人以上的学者参加,并收到了从语言
学到历史、经济等各个领域的论文。可以说土耳其的日本
学在强大的历史性基础上存在着巨大的潜力。

【执笔者: 埃利达尔·库苏雅辛

(土耳其海峡大学·亚洲学研究所助教)】

战后的土耳其与日本之间的经济往来十分兴盛,而
文学上的交流却并不充足。从1959年出版的《日本文学短
编集》算起,有60多本日本文学作品被译成土耳其语。但
到21世纪为止,这些作品的都是从英语、法语、德语等欧
洲语言翻译而来的。此次报告通过对作家、作品、译者以
及出版社的介绍,探析了近50年来日本文学作品翻译成土
其语的过程。

【执笔者: 奥兹·拜卡拉

(土耳其海峡大学笔译·口译学科副教授)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010
년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본
의식>의 과거·현재·미래

연구④ <일본의식>의 삼각측량-미래를 향해

제4회 연구회

터키의 일본학

강 사: 에르달 큐주케아레진(보스포루스대학교 아시
아연구소 조교수)

오구즈 베이카라(보스포루스대학교 통번역학
과 부교수)

일 시: 2014년 3월 22일(토) 16:30~19:30

장 소: 호세이대학교 58년관 2층 국제일본학연구소
세미나실

사 회: 오구치 마사시(小口雅史, 호세이대학교 국제일
본학연구소 소원, 문학부 교수)

터키에서의 일본학 성장에 대해 ‘오스만 터키’, ‘공화국
초기부터 20세기 말까지’ 그리고 ‘2000년대’라는 세 시
기로 나누어 살펴봤다. 현재 많은 대학에 일본어학과가
설치되어 높은 일본어 실력을 갖춘 연구자들이 양성되

고 있다. 이에 따라 2010년에 처음 열린 ‘일본학 학회’이
후 2013년에도 40명 이상의 학자들이 모였고 언어학을
비롯해 역사와 경제 등 다양한 분야의 논문을 제출했다.
이러한 상황을 볼때 터키의 일본학은 탄탄한 역사적 기
반을 토대로 큰 잠재력이 있다고 하겠다.

【기사집필: 에르달 큐주케아레진

(보스포루스대학교 아시아연구소 조교수)】

전후 터키와 일본은 경제적으로 활발히 교류했지만
문학적 교류는 그렇지 못했다. 1959년에 출판된 『일
본문학 단편집』을 필두로 터키어로 약 60권 정도의 작
품이 번역되었다. 이 번역본의 토대가 된 원문의 대부분
은, 21세기까지는 영어를 중심으로 한 프랑스어, 독일어
등과 같은 유럽어였다. 이 강연에서는 작가, 작품, 번역자
와 출판사 이름, 제목을 들어가며 일본문학이 터키어로
번역되는 과정에 대한 50년간의 발자취를 더듬었다.

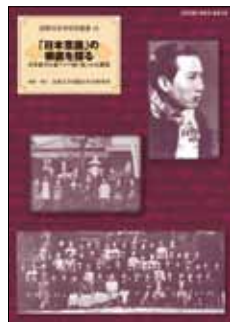
【기사집필: 오구즈 베이카라

(보스포루스대학교 통번역학과 부교수)】

法政大学国際日本学研究所

研究成果報告集『国際日本学』第11号

法政大学国際日本学研究所の研究成果報告集である『国際日本学』第11号には、研究論文が6編、特集「日本の国家アイデンティティの形成と『土着性』の問題」の成果報告論文が6編、資料紹介が1編、若手研究者論文が3編、研究アプローチ活動報告が5編、彙報が収録されている。



国際日本学研究叢書 19

『日本意識の根底を探る 日本留学と東アジア的「知」の大循環』

本書は法政大学国際日本学研究所の研究アプローチ③「＜日本意識＞の現在－東アジアから」の2013年度の活動をまとめたものである。「岐路に立つ日本と東アジアに結ばれた「知」の横糸」、「東アジアへ「日本意識」の変容」、「百年後の検証・中国人の日本留学および、その日本観」の3部に分かれ、研究論文17編が収録されている。

国際日本学研究叢書 20

『国家アイデンティティと宗教』（2012年アルザス・シンポジウム報告）

本書は2012年11月2－4日に行われた国際シンポジウム「国家アイデンティティと宗教」（2012年アルザス・シンポジウム）の成果報告書である。国際シンポジウムの成果をまとめた研究論文7編が収録され、日本の国家アイデンティティに対する宗教の果たす役割が検討されている。



ニュースレター NO.20 翻訳者紹介

（英語翻訳）

バーバラ・クロス（ロンドン大学 SOAS）

（中国語翻訳）

周 曙光（法政大学国際日本学研究所学術研究員）

（韓国語翻訳）

金 英美（法政大学国際日本学研究所学術研究員）

朴 庾卿（法政大学国際日本学研究所学術研究員）



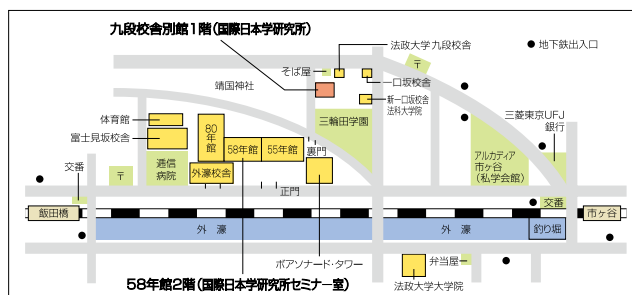
〒102-0073

東京都千代田区九段北 3-2-3 九段校舎別館 1 階

TEL : 03-3264-9682 FAX : 03-3264-9884

E-mail: nihon@hosei.ac.jp

URL: <http://hijas.hosei.ac.jp>



この冊子は再生紙を使用しています。